

みず ほ
瑞穂遺跡 6

—第 11 次調査—

大野城市文化財調査報告書 第 211 集



2024

大野城市

序

大野城市は福岡平野の一角にあたり、北側に大城山、南側に背振山系が広がる縦長の市域を有しており、その形はよくヒョウタンに例えられます。市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来し、数多くの文化財が残る歴史豊かな街です。

今回報告する瑞穂遺跡は、市域のほぼ中央にある微高地上に位置しています。これまでの調査では、甕棺墓を中心とする弥生時代の墓地が確認されています。本書で報告する第11次調査でも、弥生時代の甕棺墓が多数見つかかり、市内有数の大規模な墓地であることが明らかになりました。また、長期間にわたり埋葬が続いたことから、弥生時代における墓地の移り変わりを知る上でも重要な成果となりました。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご理解とご協力を頂きました関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和6年3月31日

大野城心のふるさと館
館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は、大野城市瑞穂町2丁目31番6に所在する瑞穂遺跡第11次発掘調査の成果についての報告書である。
2. 調査は、目代祥子氏・目代裕恵氏・田中豊季氏・目代和也氏の委託を受け、大野城市が実施した。
3. 発掘調査は、山元瞭平が担当した。
4. 遺構実測は、山元・澤田康夫・石川 健・齋藤明日香が行った。
5. 遺構写真は、山元が撮影した。
6. 遺物写真は、牛嶋 茂（㈱写測エンジニアリング）が撮影した。
7. 遺物実測は、小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・松本友里江が行った。また、一部は九州文化財総合研究所に委託した。
8. 遺構図・遺物図製図は山元・石川・小嶋が行った。
9. 出土人骨の保存・分析については、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター舟橋京子氏に依頼した。また、出土甕棺・粘土等の分析については、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター田尻義了・足立達朗両氏に依頼した。
10. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
11. 本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
12. 本書の第1図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
13. 出土遺物・実測図・写真は、大野城市が保管・管理している。また、出土人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室が管理・保管している。
14. 本書の執筆は、第Ⅳ章を舟橋京子・米元史織・田淵朱莉、第Ⅴ章を足立達朗・田尻義了、Ⅵ章3を溝口孝司が、これ以外は山元が行った。また、編集は山元が行った。
15. 発掘調査・報告書作成に関しては、以下の方々からご教示を得た。（五十音順、敬称略）
牛嶋 茂・久住猛雄・田尻義了・溝口孝司

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査経過	1
3. 調査・整理の体制	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	
(1) 甕棺墓	5
(2) 土坑墓・木棺墓	22
(3) 弥生時代遺構出土遺物	23
IV. 瑞穂遺跡第11次調査出土人骨について	27
V. 瑞穂遺跡第11次調査出土甕棺および粘土の化学組成の比較	33
VI. 総括	
1. 遺構の変遷	36
2. 成果のまとめ	38
3. 北部九州の弥生時代の墓制の中における瑞穂墓地の位置	39

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図 調査地点位置図 (1/2,500)	4
第3図 遺構配置図 (1/100)	5
第4図 1号～5号甕棺墓実測図 (1/40)	6
第5図 1号～3号甕棺実測図 (1～4は1/10、5・6は1/6)	8
第6図 4号・5号甕棺実測図 (1/10)	9
第7図 6号～9号甕棺墓実測図 (1/40)	10
第8図 6号・7号甕棺実測図 (1/10)	11
第9図 8号～11号甕棺実測図 (18は1/6、その他は1/10)	12
第10図 10号～16号甕棺墓実測図 (1/40)	13
第11図 12号～14号甕棺実測図 (22は1/6、その他は1/10)	15
第12図 15号～17号甕棺実測図 (1/10)	16
第13図 17号～19号甕棺墓実測図 (18号甕棺墓坑工具痕は1/15、その他は1/40)	17

第14図	18号・19号甕棺実測図 (1/10)	18
第15図	20号～24号甕棺墓実測図 (1/40)	19
第16図	20号・21号甕棺実測図 (33・34は1/6、31・32は1/10)	20
第17図	22号～24号甕棺実測図 (36は1/4、その他は1/10)	22
第18図	SX01・SX02実測図 (1/40)	23
第19図	弥生時代遺構出土遺物実測図 (1/4)	24
第20図	瑞穂遺跡第11次調査出土甕棺および粘土の微量元素のハーカークー図	35
第21図	瑞穂遺跡第11次調査出土甕棺および粘土の主要元素のハーカークー図	35
第22図	瑞穂遺跡墓地変遷図 (1/300)	37
第23図	墓地の諸類型	39
第24図	墓地と身体・視線 (1)	41
第25図	墓地と身体・視線 (2)	42

表 目 次

第1表	出土遺物観察表1	25
第2表	出土遺物観察表2	26
第3表	瑞穂遺跡第11次調査出土土人骨一覧	29
第4表	瑞穂遺跡第11次調査出土甕棺と関連資料の一覧	33
第5表	瑞穂遺跡第11次調査出土甕棺および粘土の化学組成	34
第6表	瑞穂遺跡第11次調査甕棺型式一覧	36

本 文 写 真 目 次

写真1	瑞穂遺跡第11次調査出土土人骨	32
-----	-----------------	----

図 版 目 次

図版1	(1) 調査区南半部全景 (南東から)
	(2) 調査区北半部全景 (南東から)
図版2	(1) 1号甕棺墓全景 (東から)
	(2) 1号甕棺墓土層 (南から)
	(3) 1号・2号甕棺挿入状況 (北から)

- (4) 2号甕棺墓全景 (南東から)
- (5) 3号甕棺墓全景 (北西から)
- (6) 4号甕棺墓人骨出土状況 (南西から)
- (7) 4号甕棺墓全景 (北東から)
- (8) 5号甕棺挿入状況 (南西から)
- 図版3 (1) 5号甕棺墓人骨出土状況 (南西から)
- (2) 5号甕棺墓全景 (北東から)
- (3) 6号甕棺墓人骨出土状況 (北西から)
- (4) 6号甕棺墓全景 (北西から)
- (5) 7号甕棺墓全景 (南東から)
- (6) 8号甕棺挿入状況 (南東から)
- (7) 8号甕棺墓人骨出土状況 (北から)
- (8) 8号甕棺墓全景 (北から)
- 図版4 (1) 9号甕棺挿入状況 (南東から)
- (2) 9号甕棺墓人骨出土状況 (北から)
- (3) 9号甕棺墓全景 (北から)
- (4) 10号甕棺挿入状況 (南から)
- (5) 10号甕棺墓全景 (北東から)
- (6) 12号甕棺挿入状況 (南西から)
- (7) 12号甕棺墓全景 (北西から)
- (8) 13号甕棺挿入状況 (南東から)
- 図版5 (1) 13号甕棺墓全景 (北西から)
- (2) 14号甕棺墓全景 (北から)
- (3) 15号甕棺挿入状況 (北西から)
- (4) 15号甕棺墓全景 (北東から)
- (5) 16号甕棺墓人骨出土状況 (南から)
- (6) 16号甕棺墓全景 (北から)
- (7) 17号甕棺墓人骨出土状況 (南から)
- (8) 17号甕棺墓全景 (南から)
- 図版6 (1) 18号甕棺挿入状況 (南東から)
- (2) 18号甕棺墓全景 (西から)
- (3) 18号甕棺墓墓坑工具痕跡 (北東から)
- 図版7 (1) 18号甕棺墓土層 (南から)
- (2) 19号甕棺挿入状況 (南東から)
- (3) 19号甕棺墓全景 (西から)
- (4) 20号甕棺墓全景 (北西から)

- (5) 21号喪棺墓全景（北東から）
- (6) 22号喪棺墓全景（南東から）
- (7) 23号喪棺墓全景（南東から）
- (8) 24号喪棺墓人骨出土状況（東から）

- 図版8
- (1) 24号喪棺墓全景（東から）
 - (2) SX01 全景（北東から）
 - (3) SX01 土層（北東から）
 - (4) SX01 床面断ち割り（北東から）
 - (5) SX02 全景（南から）
 - (6) 調査風景1（東から）
 - (7) 調査風景2（南東から）
 - (8) 調査前全景（南東から）

図版9 出土遺物 1

図版10 出土遺物 2

図版11 出土遺物 3

図版12 出土遺物 4

図版13 出土遺物 5

図版14 出土遺物 6

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

瑞穂遺跡は市域中央部、牛頸川左岸の沖積微高地上に位置する。これまで10回にわたり発掘調査が実施されており、弥生時代の甕棺墓・石棺墓・土坑墓、古墳時代の墳墓や竪穴建物跡、古代の土坑墓、近世の甕棺墓などが確認されている。

調査地は瑞穂町2丁目31番6で、周知の埋蔵文化財包蔵地「瑞穂遺跡」にあたる。埋蔵文化財の照会を受け、令和3（2021）年11月30日に試掘調査を実施したところ、現地表下20cmで遺構が確認された。事業者は当該地に分譲住宅を建設する予定で、杭を打設する計画であり、遺構の保護が困難であることから、発掘調査が必要と判断された。事業者からの計画予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和4（2022）年3月28日付で発掘調査の指示が出された。また、事業者から令和4年3月22日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。これを受け、令和4年4月6日から同年7月15日にかけて発掘調査を実施した。調査対象面積は185㎡である。整理作業は、令和5年度に実施した。多大なるご理解とご協力を頂いた目代祥子氏・目代裕恵氏・田中豊季氏・目代和也氏には、記して感謝の意を申し上げたい。

2. 調査経過

発掘調査は、令和4年4月6日から開始した。調査地を2区に分け、はじめに南半部に着手した。甕棺墓14基・木棺墓1基・土坑墓1基を確認し、5月10日に高所作業車による全景写真撮影を行った。その後、甕棺・人骨の記録作成と取り上げを行い、5月31日に作業を完了した。6月1日から北半部の調査に移行し、甕棺墓10基を確認した。6月10日に高所作業車を用いた全景写真撮影を行った。6月30日に全ての記録作成を終え、7月15日に埋め戻しが完了し、引き渡しを行った。なお、5月8日には現地説明会を実施し、111名の参加者を得た。

3. 調査・整理の体制

令和4年度および令和5年度における体制は、以下の通りである。

市長	井本 宗司		
地域創造部長	増山 竜彦（～5年3月）	日野 和弘（5年4月～）	
大野城市心のふるさと館			
館長	赤司 善彦		
文化財担当 課長	石木 秀啓		
係長	林 潤也	上田 龍児	主査 徳本 洋一（～5年3月）
主任主事	秋穂 敏明（～5年3月）	濱田 裕之（5年4～6月）	
	下川 みお（5年7月～）		
主任技師	龍 友紀（5年4月～）	山元 瞭平	

技師	齋藤 明日香（～5年3月）
会計年度任用職員	澤田 康夫 石川 健 山村 智子 深町 美佳 照屋 真澄（～5年3月） 尾川 絢香（5年4月～） 清水 康彰 大塚 健三（～5年3月） 藤田 香（5年4月～）
会計年度任用職員（事務補助）	井之口 彩子 山上 敬子（～5年3月） 西村 恭子（5年4月～）
会計年度任用職員（発掘作業）	船越 桃子 篠崎 繁美 東島 真弓
安里 由利子 小林 敏子 坂本 泰子 浅田 ふえ 川崎 敏次 佐藤 寛之	
吉田 秀俊 田中 良一 網島 年朗 武藤 マリ子 田代 薫 金子 伸子	
佐野 敏彦 佐々田 薫 滝口 松夫 大津 幸男 安倍 五郎 松田 紀雄	
横野 茂樹 夙 一文	
会計年度任用職員（整理作業）	仲村 美幸 小嶋 のり子 津田 りえ
松本 友里江 氷室 優 古賀 栄子 篠田 千恵子 小畑 貴子 眞田 萌世	

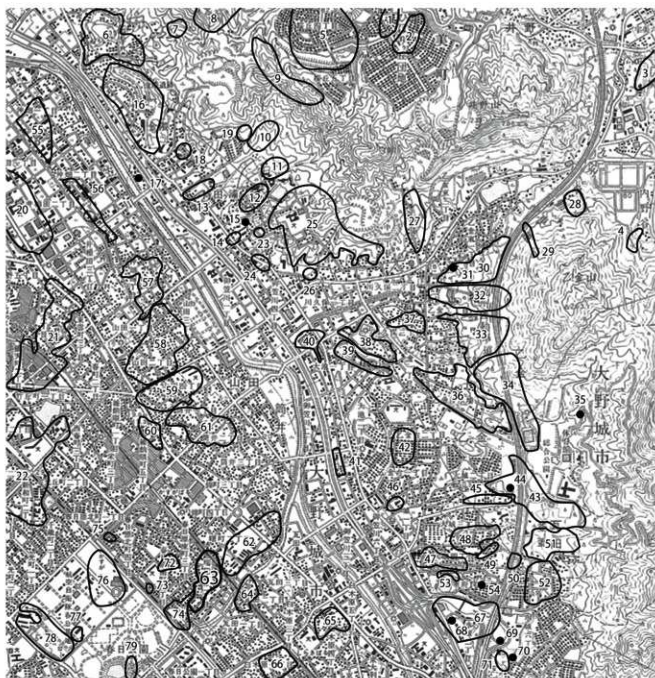
Ⅱ. 位置と環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域北東部には三郡山塊周縁部の井野山、乙金山、大城山が連なり、中央部には御笠川が流れている。ここでは、瑞穂遺跡の所在する大野城市北部の遺跡を概観する。

旧石器時代の遺跡は少ないが、釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、松葉園遺跡、薬師の森遺跡などの丘陵上の遺跡でナイフ形石器や細石刃といった遺物が確認されている。市域では縄文時代草創期の遺構・遺物は確認されていない。早期になると、釜蓋原遺跡、善一田遺跡といった丘陵上の遺跡において押型土器が出土している。前期から中期にかけての遺跡は見つかっておらず、後・晩期には、市南部の塚原遺跡等で住居が確認されている。

弥生前期の遺跡は丘陵部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、塚口遺跡で木棺墓・甕棺墓といった墓地が営まれている。集落は仲島遺跡やヒケシマ遺跡が平野部に展開する。中期には、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が前期から継続し、丘陵部には中・寺尾遺跡や森園遺跡が展開する。墳墓については、前期から継続する中・寺尾遺跡のほか、瑞穂遺跡や森園遺跡において、甕棺墓群が営まれている。後期になると、仲島遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡などで集落が認められる。仲島遺跡では貨布や銅鏡、青銅器鋳型などが出土しており、拠点集落と考えられる。

市域北部の前期古墳には御陵古墳群があり、割竹形木棺や箱式石棺を主体部とした円墳が確認されている。また、御陵古墳出土と伝わる三角縁神獣鏡があり、有力な首長層の存在が想定される。集落は仲島遺跡や石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から継続し、瑞穂遺跡や原ノ畑遺跡では新たに集落が展開する。中期には5世紀前半に位置付けられる笹原古墳があり、5世紀後半には古野遺跡で群集墳の形成が始まる。当該期の集落は、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、原田遺跡など



- | | | | | | |
|-----------------|-----------------|------------|-------------|-----------------|---------------------|
| 1. 岩長浦古墳群 | 13. 持田ヶ浦古墳群 E 群 | 27. 唐山道跡 | 42. 畠山道跡 | 57. 川原道跡 | 71. 裏ノ田道跡 |
| 2. 観音浦古墳群 | 14. 持田ヶ浦古墳群 F 群 | 28. 乙金北古墳群 | 43. 埴ヶ尾道跡 | 58. 御笠の森道跡 | 春日市 |
| 3. 正藏古墳群 | 15. 今里不動古墳 | 29. 上唐山道跡 | 44. 埴ヶ尾道跡 | 59. 宝松道跡 | 72. 駿河 E 道跡 |
| 4. 内野谷古墳群 | 16. 金隈道跡群 | 30. 善一田道跡 | 45. 埴ヶ尾古墳 | 60. 雄獅院道跡 | 73. 駿河 B 道跡 |
| 志免町 | 17. 丸山古墳 | 31. 乙金塚跡 | 46. 原門道跡 | 61. 村下道跡 | 74. 原ノ口道跡 |
| 5. 坂ヶ丘古墳群 | 18. 影ヶ浦古墳群 | 32. 王鳩山道跡 | 47. 金山道跡 | 62. 石勺道跡 | 75. 駿河 D 道跡 |
| 福岡市 | 19. 堤ヶ浦古墳群 | 33. 古野道跡 | 48. 原田道跡 | 63. 瑞穂道跡 | 76. 駿河 A 道跡 |
| 6. 立花寺道跡群 | 20. 井相田 C 道跡群 | 34. 原口道跡 | 49. 曲り目道跡 | 64. 因分田道跡 | 77. 先ノ原 B 道跡 |
| 7. 七曲古墳群 | 21. 麦野 C 道跡 | 35. 此岡古墳群 | 50. 釜蓋原道跡 | 65. 原ノ畑道跡 | 78. 立石道跡 |
| 8. 七曲古墳群 | 22. 雄獅院道跡群 | 36. 薬師の森道跡 | 51. 汐井川道跡 | 66. 後原道跡 | 79. 先ノ原・春日
公園内道跡 |
| 9. 持田ヶ浦古墳群 A 群 | 23. 御陵脇道跡 | 37. 松葉園道跡 | 52. 中ノ原道跡 | 67. 成屋形道跡群 | |
| 10. 持田ヶ浦古墳群 B 群 | 24. 塚口道跡 | 38. 森園道跡 | 53. 金ヶ浦道跡 | 68. 成屋形古墳 | |
| 11. 持田ヶ浦古墳群 C 群 | 25. 御陵道跡 | 39. 中ノ寺尾道跡 | 54. 徳原古墳 | 69. 裏ノ田道跡 | |
| 12. 持田ヶ浦古墳群 D 群 | 26. 御陵前ノ椽道跡 | 40. ヒケシマ道跡 | 55. 仲島本間尺道跡 | 70. 裏ノ田古墳 | |
| | | 41. 榎町道跡 | 56. 仲島道跡 | | |

第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

がある。後期になると、乙金山・四王寺山の麓に大規模な群集墳が展開する。善一田古墳群や大城山古墳群が代表的で、6世紀後半から7世紀代にかけて造墓・追葬が行われている。古墳群に対応する集落として、薬師の森遺跡があり、鉄器や須恵器の生産に関わる集落とされる。乙金山・四王寺山麓における群集墳は7世紀前半をピークに、築造数が減少する。集落は、薬師の森遺跡や仲島遺跡などに展開する。

奈良時代になると律令国家が整い、大宰府を中心とした西海道一帯の支配体制が成立する。水城を抜けて博多方面に通じる東西2本の官道が整備され、官道沿いには仲島遺跡や雑餉隈遺跡など大規模な集落が展開する。平安時代前半には遺跡数が減少し、仲島遺跡や井相田C遺跡は9世紀代に消滅する。平安時代後半には大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、中世都市博多が成立する。集落は塚口遺跡、御笠の森遺跡、宝松遺跡があり、森園遺跡、松葉園遺跡などでは貿易陶磁器を副葬する土坑墓が見つかっている。



第2図 調査地点位置図 (1/2,500)

Ⅲ. 調査の成果

1. 調査の概要

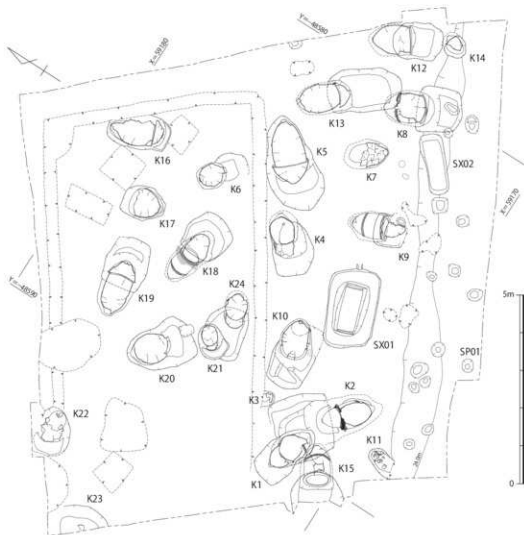
調査地は、大野城市瑞穂町2丁目31番6に所在し、牛頸川左岸の微高地上に位置している。調査対象地は標高24m前後の平坦な土地で、調査前は宅地として利用されていた。客土(20cm)直下で橙色粘質土の遺構面となる。調査の結果、甕棺墓24基・土坑墓1基・木棺墓1基・ピットを複数確認した。また、調査区の南側では、南に向かって緩やかに傾斜する地形の変化を確認した。この地形の変化は、墓地の展開する微高地の南端部と考えられる。

2. 遺構と遺物

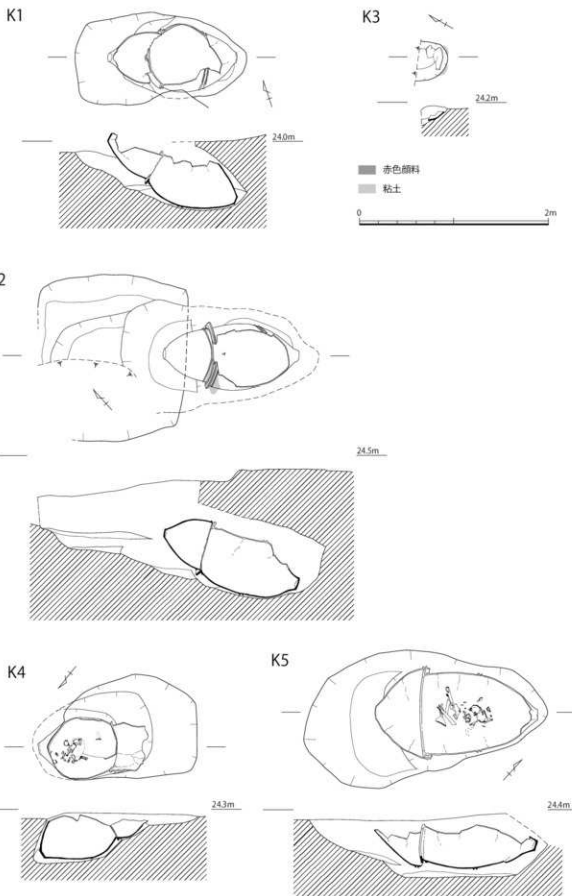
(1) 甕棺墓

1号甕棺墓(第4・5図、図版2・9)

調査区西側に位置する大型棺で、2号甕棺墓を切る。甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。



第3図 遺構配置図 (1/100)



第4図 1号～5号甕棺墓実測図 (1/40)

墓坑は大きく削平されるが、長軸 1.1 m 前後（底面 0.15 m）、短軸 0.95 m（底面 0.75 m）の角丸方形を呈し、深さ 0.6 m を測る。下甕は東側壁面へ 0.8 m ほど挿入されたとみられる。上甕内面には部分的に赤色顔料が付着していた。甕棺の主軸は $N-72^{\circ}-W$ で、傾斜角度は 25° である。

1 は上甕。胴部中位で打ち欠かれており、外面にはハケメが残る。また、内面に赤色顔料が付着するが、内面の一部に限られることから、塗布ではなく埋葬時の散布の可能性が考えられる。2 は下甕。胴部は丸みを帯び、口縁部に向かって内湾する。口縁部は逆 L 字状を呈し、内側はわずかに突出する。口縁下に三角突帯が 1 条めぐり。また、胴部中位に台形突帯が 2 条めぐり。外面の下半にハケメが残る、部分的に黒塗りの痕跡が認められる。

2号甕棺墓（第4・5図、図版2・9）

調査区西側に位置する大型棺で、1号甕棺墓に切られる。甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸 1.75 m、短軸 1.6 m 前後（底面 0.55 m）の角丸方形をなし、深さ 1.25 m である。上甕側には階段状のテラスが 3 段あり、上甕の一部および下甕は南側壁面へ 1.2 m ほど挿入される。甕棺の主軸は $N-48^{\circ}-W$ で、傾斜角度は 22° である。

3 は上甕。胴部中位で打ち欠かれている。台形突帯が 1 条めぐり、底部付近に直径 6 cm の円孔が穿たれる。外面に黒色顔料が塗布される。4 は下甕。胴部中位が膨らみ、口縁部にかけて内湾する。口縁部は逆 L 字状をなし、内側はわずかに突出する。口縁下に三角突帯が 1 条めぐり、胴部中位に台形突帯が 2 条めぐり。外面底部付近に縦方向のハケメが残る。胴部中位には径 3 cm の穿孔が施される。

3号甕棺墓（第4・5図、図版2・9）

調査区西側に位置する小型棺である。削平により遺存状況は極めて悪く、後述する壺の天地や上下棺の判別も困難であった。墓坑は長軸 0.4 m 以上、短軸 0.3 m を測り、深さ 0.2 m である。甕棺の主軸は $N-30^{\circ}-W$ で、傾斜角度は約 30° である。壺と甕が 1 個体ずつ出土し、前者は確実に本遺構に伴うが、後者は出土した土器片に含まれており、壺との関係性は明らかではない。

5 は壺。胴部やや上位に最大径を持ち、丸みを帯びた器形である。頸部に三角突帯が 1 条めぐり、内外面ともにハケメが残る。6 は甕。口縁部はくの字状を呈し、口縁の屈曲部近くに三角突帯が 1 条めぐり。

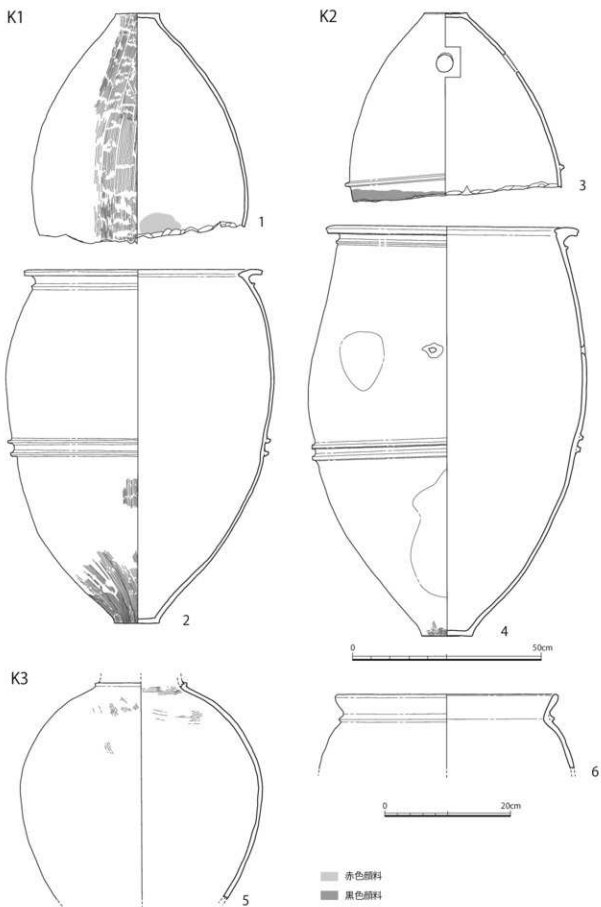
4号甕棺墓（第4・6図、図版2・10）

調査区中央に位置する大型棺で、甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸 1.4 m 前後（底面 0.4 m）、短軸 1.1 m（底面 0.85 m）の角丸長方形を呈し、深さ 0.5 m を測る。下甕は北側壁面へ 0.1 m ほど挿入される。甕棺の主軸は $N-48^{\circ}-E$ で、傾斜角度は 51° である。

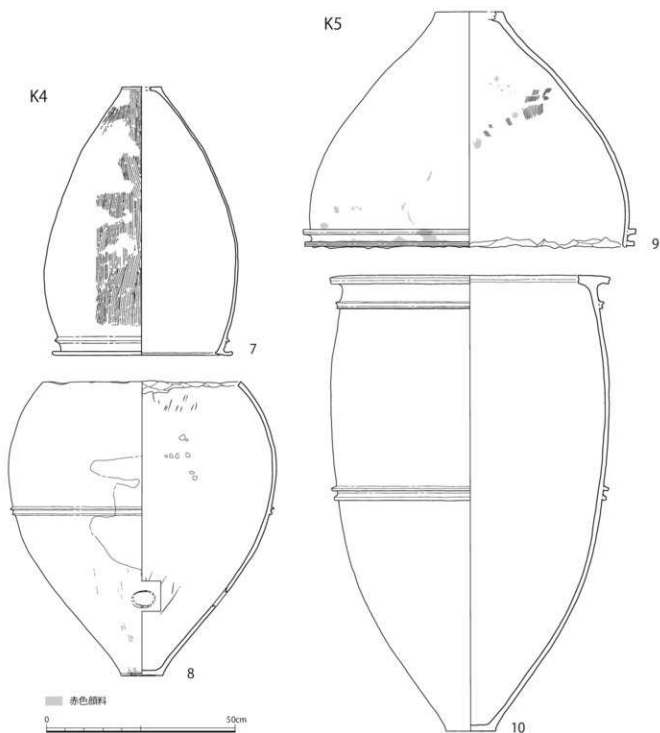
7 は上甕。内傾する逆 L 字状の口縁をなし、口縁下に三角突帯が 1 条めぐり。外面は縦方向のハケメ調整で、煤が付着する。8 は下甕で、口縁部は打ち欠かれている。胴部は丸みを帯び、中ほどに三角突帯が 2 条めぐり。底部付近に直径 5 cm の円孔が施される。

5号甕棺墓（第4・6図、図版2・3・10）

調査区中央東側に位置し、4号甕棺墓に隣接する大型棺である。甕と甕を組み合わせた覆口式甕棺である。墓坑は長軸 2.5 m（底面 1.2 m）、短軸 1.4 m（底面 0.7 m）の楕円状をなし、深さ 0.65



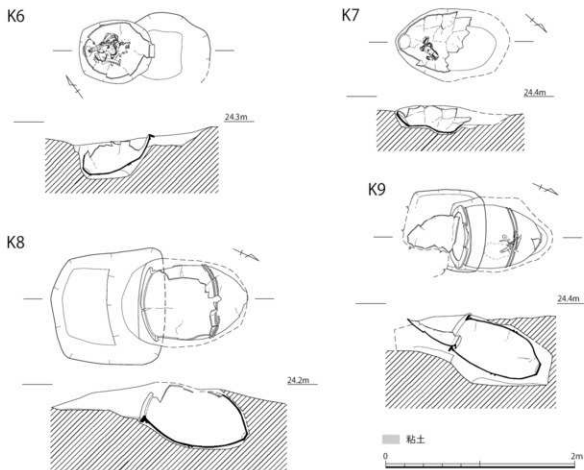
第5図 1号～3号甕棺実測図 (1～4は1/10、5・6は1/6)



第6図 4号・5号甕棺実測図 (1/10)

mを測る。甕棺の主軸はN-48°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

9は上甕。胴部中位で打ち欠かれており、方形突帯が2条めぐる。突帯は打ち欠き部分に近い1条のみが赤彩される。また、内外面には赤色顔料が垂れたり、飛び散ったような痕跡が認められる。胴部外面には黒塗りの痕跡があり、内面にはハケメがわずかに残る。10は下甕。胴部は砲弾形で、口縁部に向かって内湾気味にのびる。口縁部はT字状で、上面はほぼ水平である。口縁下にM字状突帯が1条めぐる。また、胴部中位に台形突帯が2条めぐる。



第7図 6号～9号甕棺墓実測図 (1/40)

6号甕棺墓 (第7・8図、図版3・10)

調査区中央東側に位置する小型棺で、甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸0.8 m前後(底面0.5 m)、短軸0.65 m(底面0.3 m)の楕円状をなし、深さ0.5 mを測る。甕棺の主軸は $N-54^{\circ}-W$ で、傾斜角度は 45° である。

11は上甕で、底部を欠失する。胴部上位から口縁部に向かって内湾する。口縁部はくの字状で内傾し、口縁下に三角突帯が1条めぐる。また、胴部中位に台形突帯が2条めぐる。12は下甕。胴部上位から口縁部に向かって内湾する。口縁部はくの字状で内傾し、口縁下に三角突帯が1条めぐる。また、胴部中位に台形突帯が2条めぐる。

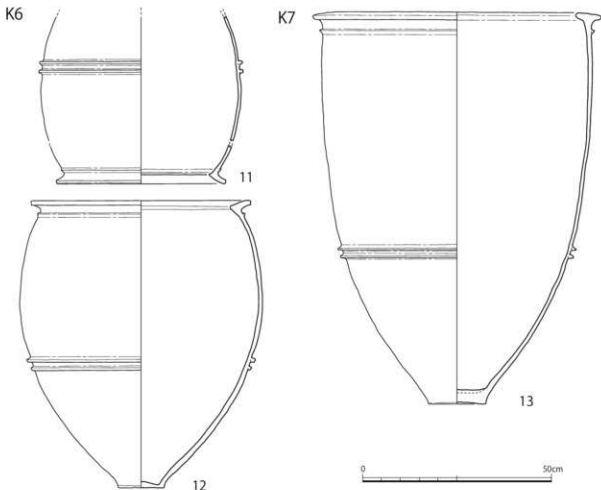
7号甕棺墓 (第7・8図、図版3・11)

調査区中央東側に位置する大型棺である。上面が大きく削平されるため、上甕の有無や墓坑の規模・形状は不明だが、甕棺の主軸は $N-41^{\circ}-W$ で、傾斜角度はほぼ水平である。

13は下甕で、胴部は砲弾形を呈する。口縁部はT字状で、外側へわずかに傾斜する。口縁下には三角突帯が1条めぐる、胴部下位には台形突帯が2条めぐる。底部は厚みがある。

8号甕棺墓 (第7・9図、図版3・11)

調査区東側に位置する大型棺で、甕を用いた単棺である。墓坑は長軸1.25 m(底面0.8 m)、短軸1.2 m(底面0.45 m)の角丸方形を呈し、深さは0.65 mである。甕棺の主軸は $N-25^{\circ}-W$ で、



第8図 6号・7号甕棺実測図 (1/10)

傾斜角度は 26° である。

14は下甕で、胴部上位がやや内湾し、丸みを帯びた器形である。口縁部はくの字状で、やや内傾する。口縁下に三角突帯が1条めぐり、胴部中位には台形突帯が2条めぐり、外面には縦方向のハケメが残る。口縁部周辺は黒塗りの痕跡が認められる。

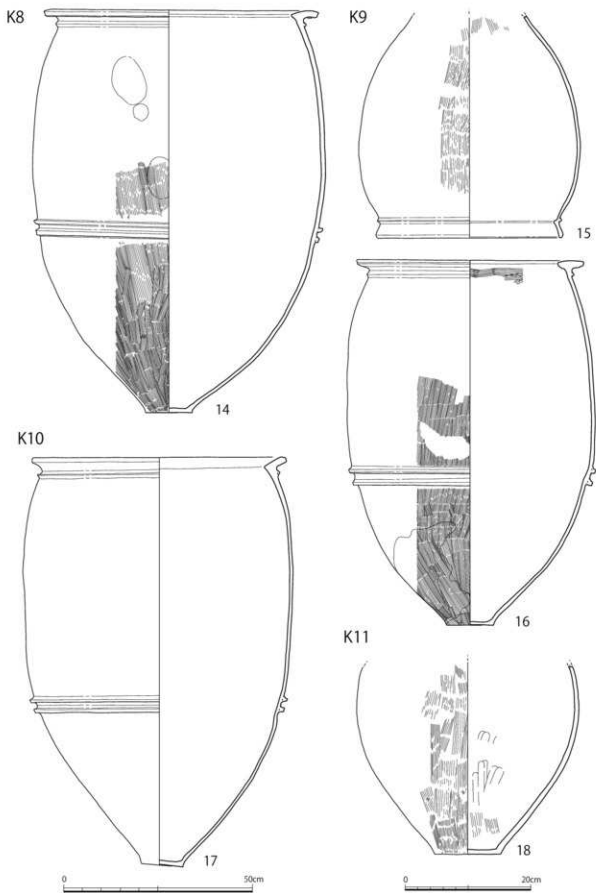
9号甕棺墓 (第7・9図、図版4・11)

調査区中央南側に位置する大型棺で、甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸0.85m(底面0.75m)、短軸0.8m以上(底面0.35m以上)の角丸方形を呈し、深さ0.7mを測る。下甕は北側壁面に0.6m程度挿入される。甕棺の主軸はN- 25° -Wで、傾斜角度は 26° である。

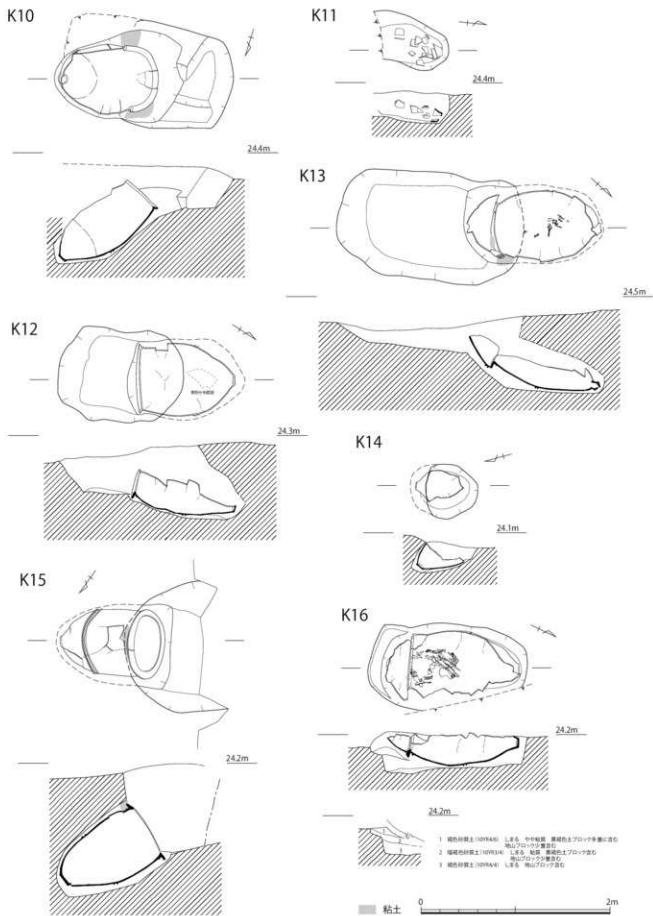
15は上甕で、底部を欠失する。胴部上位は丸みを帯び、口縁部はくの字状で内湾する。頸部に三角突帯が1条めぐり、外面はハケメである。16は下甕で、口縁部はT状である。口縁下に三角突帯が1条めぐり、胴部下位に台形突帯が2条めぐり、外面は縦方向のハケメが残る。

10号甕棺墓 (第9・10図、図版4・11)

調査区中央西側に位置する大型棺である。甕を用いた単棺で、口縁部に粘土の目張りがある。墓坑は長軸1.2m以上(底面0.3m)、短軸1.1m(底面0.5m)の角丸方形をなし、深さは1.05mを測る。墓坑西側には階段状のテラスが2段あり、東側壁面に横口を掘り込んで、甕の大半を壁面



第9図 8号～11号甕棺実測図 (18は1/6、その他は1/10)



第10図 10号～16号甕棺墓実測図 (1/40)

に挿入する。甕棺の主軸は $N-73^{\circ}-E$ で、傾斜角度は 43° である。

17 は下甕で、胴部は砲弾形をなす。口縁部はくの字状で内傾し、口縁下に三角突帯が1条めぐる。また、胴部下位には台形突帯が2条めぐる。口縁部や胴部に黒塗りの痕跡が認められる。

11号甕棺墓（第9・10図、図版11）

調査区南西側に位置する小型棺で、削平により上甕の有無や墓坑の全様は不明である。墓坑は長軸 0.7 m 以上（底面 0.6 m 以上）、短軸 0.5 m （底面 0.4 m ）、深さ 0.3 m を測る。甕棺の主軸方向は $N-73^{\circ}-W$ で、傾斜角度は不明である。

18 は下甕で、口縁部を欠失する。胴部中位に最大径があり、丸みを帯びた器形である。外面は縦方向のハケメ、内面にもハケメがわずかに残る。

12号甕棺墓（第10・11図、図版4・12）

調査区南東側に位置する大型棺で、甕を用いた単棺である。墓坑は長軸 1.3 m （底面 0.45 m ）、短軸 0.95 m （底面 0.75 m ）の角丸長方形をなし、深さ 0.85 m を測る。北側壁面に横口を掘り込んで、甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸は $N-34^{\circ}-W$ で、傾斜角度は 20° である。

19 は下甕。胴部は丸みを帯び、口縁部は逆L字状で、内側はわずかに突出する。口縁下に台形突帯が1条めぐる。また、胴部中位に台形突帯が2条めぐる。

13号甕棺墓（第10・11図、図版4・5・12）

調査区東側に位置する大型棺で、甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は、長軸 1.95 m （底面 1.05 m ）、短軸 1.15 m （底面 0.85 m ）の角丸長方形をなし、深さ 0.75 m を測る。北側壁面に横口を掘り込んで、下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸は $N-42^{\circ}-W$ で、傾斜角度は約 25° である。上下甕の合わせ目には、粘土の目張りがある。

20 は上甕。胴部中位で打ち欠かれており、台形突帯が2条めぐる。底面にはハケメが残り、外面黒塗りである。21 は下甕。胴部は丸みを帯び、口縁部に向かって内湾する。口縁部はくの字状を呈し、口縁下には台形突帯が1条めぐる。胴部中位には台形突帯が2条めぐる。

14号甕棺墓（第10・11図、図版5・12）

調査区南東側に位置する小型棺で、12号甕棺墓に隣接する。甕を用いた単棺である。墓坑は長軸 0.7 m （底面 0.5 m ）、短軸 0.6 m （底面 0.4 m ）の楕円形を呈し、深さ 0.3 m を測る。北側壁面に横口を掘り込んで、下甕を挿入する。甕棺の主軸は $N-15^{\circ}-E$ で、傾斜角度は 38° である。

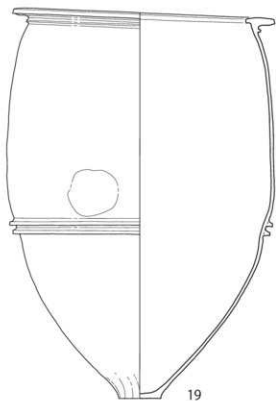
22 は下甕で、口縁部から胴部上半を失う。底部から丸みを帯びて立ち上がる。外面は縦方向のハケメである。

15号甕棺墓（第10・12図、図版5・12）

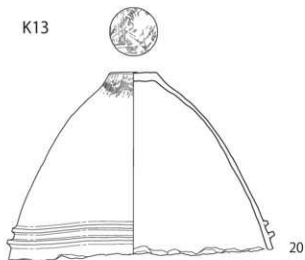
調査区西側に位置する大型棺である。甕を用いた単棺で、口縁部に粘土の目張りがある。墓坑は調査区外へと続いたため、全形は不明だが、幅 1.35 m 、深さ 1.35 m を測る。東側壁面に横穴を掘り込んで、甕の大部分は壁面に挿入する。甕棺の主軸は $N-54^{\circ}-E$ で、傾斜角度は 33° である。

23 は下甕。胴部上位がやや内湾し、丸みを帯びた器形である。口縁部は逆L字状を呈する。口縁下には台形突帯が1条めぐる、胴部中位には台形突帯が2条めぐる。外面には縦方向のハケメがわずかに残る。

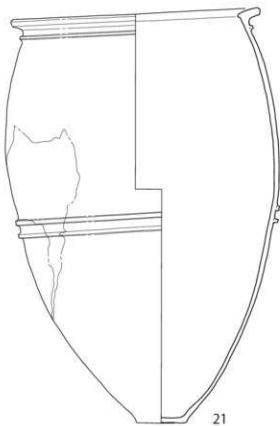
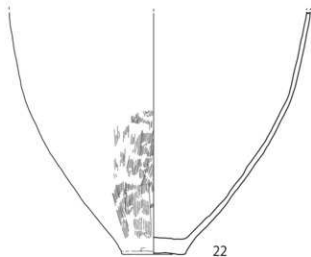
K12



K13



K14



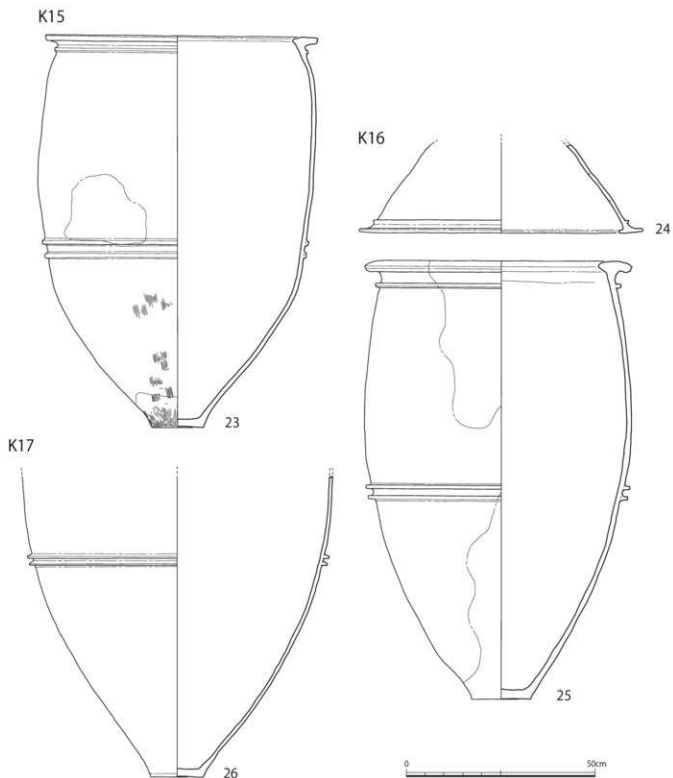
0 20cm

0 50cm

第11図 12号～14号甕棺実測図 (22は1/6、その他は1/10)

16号甕棺墓 (第10・12図、図版5・13)

調査区北側に位置する大型棺で、鉢と甕を組み合わせた接合式甕棺である。上面及び東側側面が大きく削平され、遺存状況は悪い。墓坑は長軸 1.7 m (底面 1.45 m)、短軸 0.85 m (底面 0.55 m)、

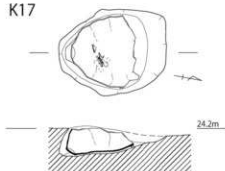


第12図 15号～17号甕棺実測図 (1/10)

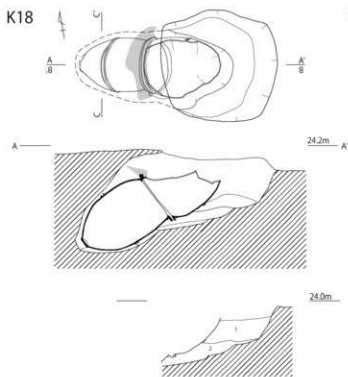
深さ0.45mを測る。南側にはテラスが1段ある。墓坑は10cm程度の単位で徐々に埋められている。甕棺の主軸はN-26°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

24は上甕の鉢で、底部を欠失する。口縁部はT字状で、やや外傾する。口縁下には三角突帯が1条めぐる。外面は黒塗りである。25は下甕。口縁部はT字状で、上面は水平である。口縁下に

K17

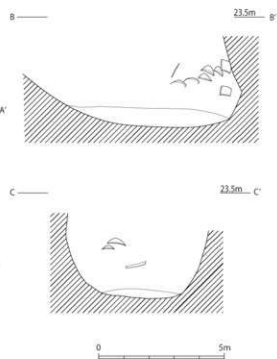


K18

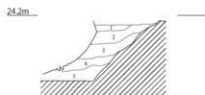
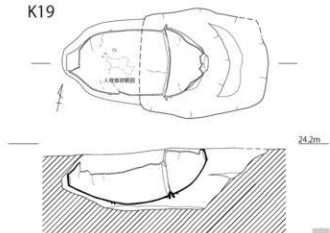


1. 磁器の付着土(1079A) 土はらえる 中平船塚 焼山アコウチ多量(遺石)
2. 土に土(黄褐色の付着土(1079A)) Lはる 船塚 焼山アコウチ少量(遺石)

K18 墓坑工具痕



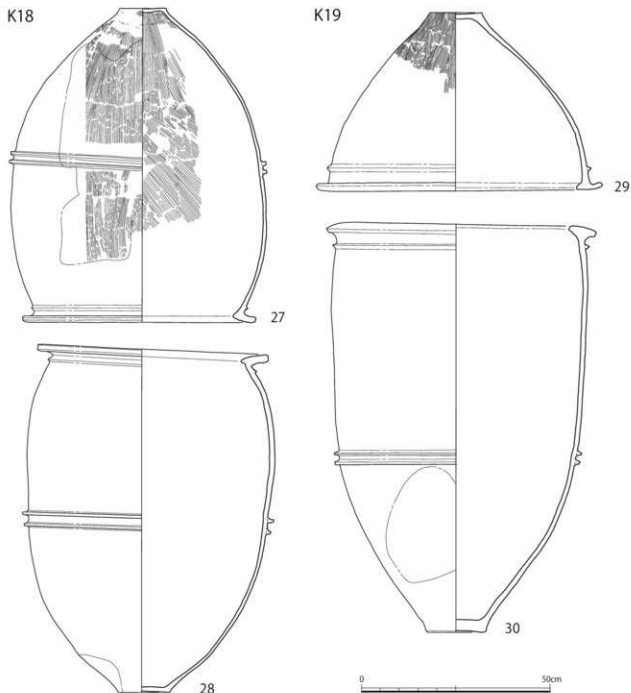
K19



1. 磁器の付着土(1079A) Lはる 中平船塚 黄褐色土、焼山アコウチ多量(遺石)
2. 磁器の付着土(1079A) Lはる 船塚 黄褐色土(中平船塚遺石)
3. 磁器の付着土(1079A) Lはる 船塚 内装 土(1079A)
4. 土に土(黄褐色の付着土(1079A)) Lはる 船塚 焼山アコウチ少量(遺石)
5. 土に土(黄褐色の付着土(1079A)) Lはる 船塚 内装 土(1079A)

0 粘土 2m

第 13 図 17 号～19 号甕棺墓実測図 (18 号甕棺墓坑工具痕は 1/15、その他は 1/40)



第14図 18号・19号甕棺実測図 (1/10)

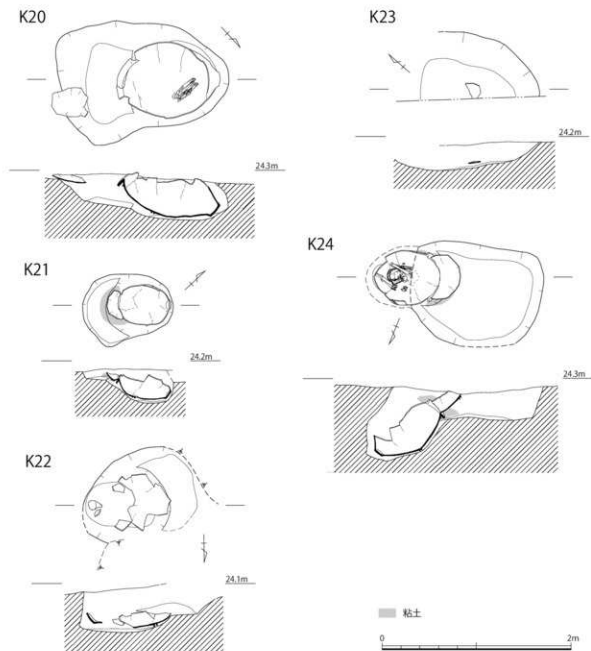
は台形突帯が1条めぐる。また、胴部中位には台形突帯が2条めぐる。

17号甕棺墓 (第12・13図、図版5・12)

調査区北側に位置する大型棺である。上面が大きく削平されるため、上甕の有無や墓坑の規模・形状は不明だが、甕棺の主軸はN-11°-Wで、傾斜角度は45°前後である。

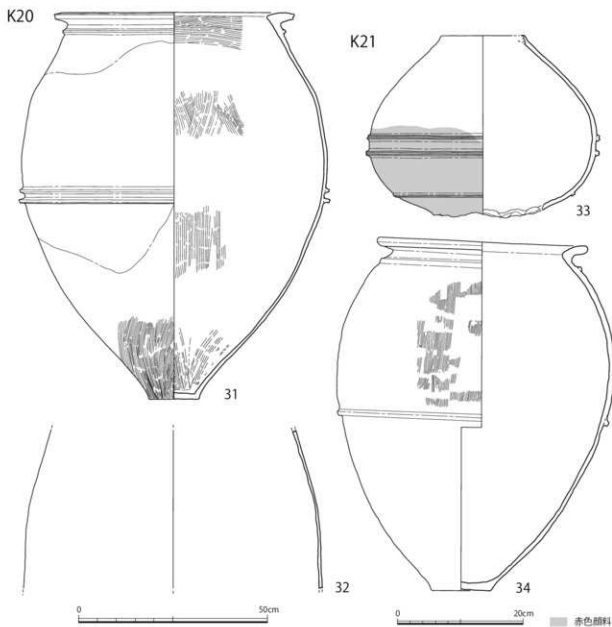
26は下甕で、口縁部から胴部上半を欠く。丸みを帯びた器形で、底部から内湾気味に立ち上がる。外面に高さのある台形突帯が2条めぐる。

18号甕棺墓 (第13・14図、図版6・13)



第15図 20号～24号甕棺墓実測図(1/40)

調査区中央に位置する大型棺で、甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸 1.2 m (底面 0.2 m)、短軸 1.15 m (底面 1.05 m) の角丸方形を呈し、深さ 1.05 m である。墓坑西側にはテラスが 1 段あり、東側壁面に横穴を掘り込んで、下甕および上甕の一部を壁面に挿入する。なお、横穴の壁面に掘削時の掘削痕跡を確認した。痕跡は上方から下方へ斜めに入り込んでおり、下端部にはわずかにステップが生じている。ステップの幅は 10cm 程度であり、平面が三日月状をなすことから湾曲した刃先を有した道具とみられ、柄のついた小型の鍬のようなものを振り下ろして掘削した可能性が考えられる。なお、横穴と甕棺に空間はほとんどないことから、挿入される甕棺のサイズに合わせて掘削が行われたとみられる。また、墓坑は埋土の堆積状況から、上甕を固定しつ



第 16 図 20 号・21 号甕棺実測図 (33・34 は 1/6、31・32 は 1/10)

つ数回に分けて埋められている。上下甕の合わせ目は粘土で目張りされており、上面にのみ分厚く粘土が貼り付けられる。甕棺の主軸は $N-80^{\circ}-E$ で、傾斜角度は 33° である。

27 は上甕で、上位は内湾して立ち上がり、丸みを帯びた器形である。口縁はくの字型を呈し、やや内傾する。口縁下には三角突帯が 1 条めぐり、胴部中位には台形突帯が 2 条めぐり、内外面ともハケメが残る。28 は下甕。胴部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁部はくの字状を呈し、若干内傾する。また、内側へわずかに突出する。口縁下には三角突帯が 1 条めぐり、胴部中位には台形突帯が 2 条めぐり。

19 号甕棺墓 (第 13・14 図、図版 7・13)

調査区北西側に位置する大型棺で、鉢と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸 1.3 m 前後 (底面 1.05 m)、短軸 1.05 m (底面 0.45 m) の角丸長方形をなし、深さ 0.65 m を測る。墓

坑西側にはテラスが1段ある。墓坑は10cm程度の単位で徐々に埋められている。甕棺の主軸はN-78°-Eで、傾斜角度は11°である。

29は上甕の鉢。胴部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はT字状をなし、わずかに外傾する。口縁下には断面三角形の突帯が1条めぐる。外面下半には縦方向のハケメが残る。また、外面全体に黒塗りの痕跡が認められる。30は下甕で、胴部は砲弾形を呈する。口縁部はT字状をなし、わずかに外傾する。口縁下には三角突帯が1条めぐる。また、胴部中位よりやや下方に台形突帯が2条めぐる。

20号甕棺墓（第15・16図、図版7・14）

調査区中央西側に位置する大型棺で、上面が大きく削平される。墓坑は長軸1.8m（底面0.45m）、短軸1.25m（底面0.8m）の不定形をなし、深さ0.4mを測る。墓坑南側にはテラスが1段設けられており、甕棺の一部が出土した。これは墓坑北側で検出した甕とは別個体とみられ、これとセットとなる上甕の可能性もあるが、突帯のない胴部片であり詳細は不明である。甕棺の主軸はN-47°-Wで、傾斜角度は32°である。

31は下甕。胴部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁部は逆L字状で、わずかに内傾する。口縁下には断面台形の突帯が1条めぐる。また、胴部中位には断面台形の突帯が2条めぐる。胴部は内外面ともに縦方向のハケメ、口縁部付近の内面には横方向のハケメが施される。32は甕棺の胴部片。先述したテラス部分で出土したものである。傾きや復元径には不安が残る。内外面ナデ調整。

21号甕棺墓（第15・16図、図版7・14）

調査区中央に位置する小型棺で、24号甕棺墓を切る。甕と壺を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸0.95m（底面0.15m）、短軸0.75m（底面0.65m）の楕円形を呈し、深さ0.35mである。墓坑西側にはテラスが1段設けられており、甕棺の主軸はN-43°-Eで、傾斜角度は34°である。上甕を安定させるため、下部に白色粘土を盛っている。

33は上甕の壺。口縁部を打ち欠いており、胴部は大きく内湾する。肩部に1条のM字状突帯、胴部最大径に2条のM字状突帯がめぐる。外面は赤彩される。34は下甕。胴部上位から口縁部にかけて内湾し、丸みを帯びた器形である。口縁部はくの字状を呈し、わずかに内傾する。口縁下には三角突帯が1条めぐる。また、胴部中位には台形突帯が1条めぐる。外面は縦方向のハケメである。

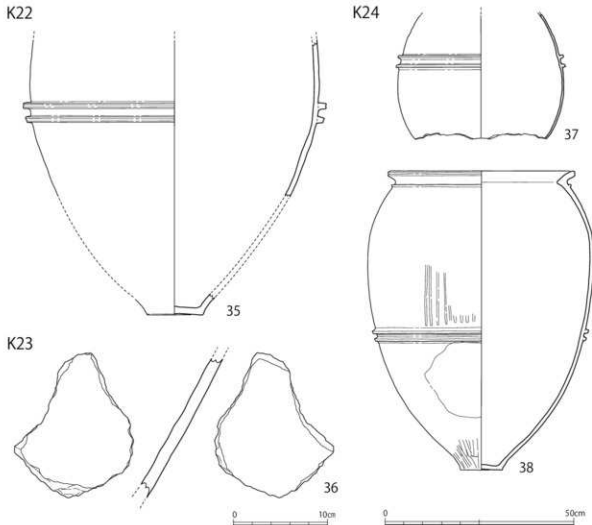
22号甕棺墓（第16・17図、図版7・14）

調査区西端に位置する大型棺で、甕を用いた単棺である。墓坑上面及び北側側面は削平され、全様は不明であるが、長軸1.4m以上（底面0.3m）、短軸0.9m以上（底面0.7m）、深さ0.45mを測る。甕棺の残存状態が悪く、主軸・傾斜角度は不明である。

35は下甕である。欠損が著しく、全形をうかがうことはできない。台形突帯が2条めぐる。外面黒塗りの痕跡が認められる。

23号甕棺墓（第15・17図、図版7）

調査区西隅に位置し、北側は削平され、西側は調査区外へのびる。墓坑内から甕棺の小片が出土したため甕棺墓としたが、不明確である。長軸1.3m以上（底面1.0m）、短軸0.7m以上（底面0.4m以上）、深さ0.25mを測る。甕棺の残存状態が悪く、主軸・傾斜角度は不明である。



第17図 22号～24号甕棺実測図(36は1/4、その他は1/10)

36は甕棺の胴部片とみられる。内外面ナデ。

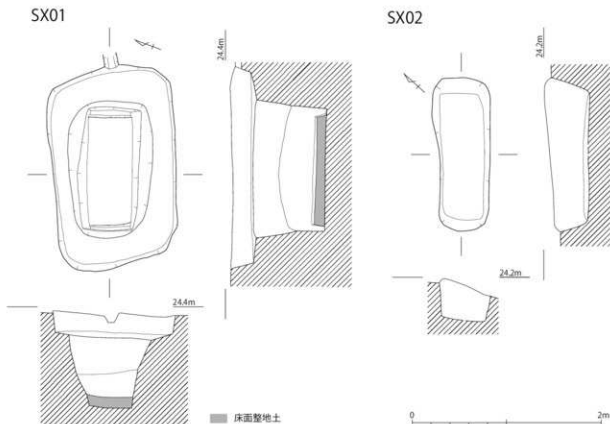
24号甕棺墓(第15・17図、図版7・8・14)

調査区中央部に位置する小型棺で、甕と甕を組み合わせた接合式甕棺である。墓坑は長軸1.4m(底面0.9m)、短軸1.05m(底面0.85m)のいびつな角丸長方形で、深さ0.8mである。甕棺の主軸はN-68°-Eで、傾斜角度は50°である。上甕を安定させるため、下部に白色粘土を盛っている。

37は上甕。口縁部は打ち欠かれており、底部は欠損する。胴部に台形突帯が2条めぐる。外面黒塗りである。38は下甕。胴部上半から口縁部にかけて内湾し、丸みを帯びた器形である。口縁はくの字状をなし、内傾する。口縁下に三角突帯が1条めぐり、胴部中位には台形突帯が2条めぐる。外面には縦方向の暗文が施される。また外面底部付近には、工具ナデの痕跡が残る。外面は黒塗りである。

(2) 木棺墓・土坑墓

SX01(第18図、図版8)



第 18 図 SX01・SX02 実測図 (1/40)

調査区中央部に位置する。平面は角丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 2.15 m、短軸 1.3 m、深さ 0.25 m、二段目は長軸 1.45m (底面 1.3 m)、短軸 0.8 m (底面 0.45 m)、深さ 0.75 m を測る。両小口部の底面には幅 0.1 m、深さ 0.1 m の溝状の掘り込みがあり、木棺小口板を設置した痕跡と考えられることから、組合式木棺の可能性が高い。なお、小口の掘り込みは底面掘削後に 0.1 m ほど埋め戻した後に掘削されている。弥生土器の破片が出土した。

SX02 (第 18 図、図版 8)

調査区南東部に位置する。平面は角丸長方形で、東のほうがやや幅広となる。長軸 1.6 m (底面 1.3 m)、短軸 0.5 ~ 0.6 m (底面 0.45 m)、深さ 0.45 m を測る。出土遺物はない。

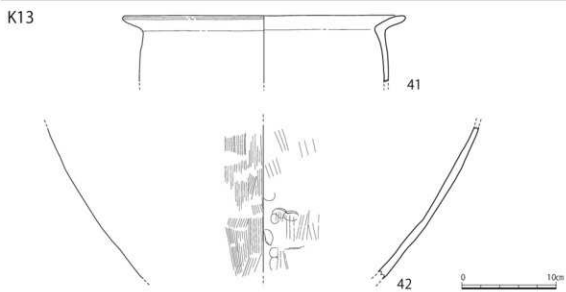
(3) 弥生時代遺構出土遺物 (第 19 図)

K2 墓坑出土弥生土器 (39・40) 39 は広口壺の口縁部片。鋤先状を呈し、上面には暗文が施される。また、端部には刻目がめぐる。40 は丹塗り甕の胴部片。外面に M 字突帯が 1 条めぐる。SX01 埋土から出土した破片と接合した。

K13 墓坑出土弥生土器 (41・42) 41 は甕の口縁部で、くの字形をなす。42 は甕の胴部片。内外面ともにハケメが残る。

K15 墓坑出土弥生土器 (43) 43 は広口壺の口縁部片。鋤先状を呈し、端部には刻目が施される。丹塗り。

SP01 出土弥生土器 (44) 小片のため器種不明。口縁下に三角突帯が 1 条めぐる。取手の剥離痕



第 19 図 弥生時代遺構出土遺物実測図 (1/4)

跡とみられるくぼみが見られる。

第1表 出土遺物観察表1

遺物 番号	種類	設備	出土 地点	法量 (cm)			形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口縁迄高さ ②口径 ③底径	最大径 (黄丸線)・内径				
1	赤土 土器	甕 (上製)	1号 甕類	①36.0 ②11.2 ③49.8		外面 ハケテ 内面 指オサエナゲナ 赤色顔料付着 体部中央を打ち欠く	A:3mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C: 内7.5/306/6 焼成色～5/306/6 焼成色 外5/306/6 焼成 色～7.5/307/4 に近い焼成色～7.5/305/4 焼成色～ 7.5/302/1 黒色	外面黒焼	
2	赤土 土器	甕 (下製)	1号 甕類	①43.0 ②30.4 ③11.8 ④71.0		外面 体部・口ノメ後ナゲナ削り・黒塗り 内面 ナゲ	A:3mm以下の白色砂子、赤色顔料、長石、雲母を含む B:良好 C:内7.5/307/6 焼成色 外7.5/306/6 焼成色～ 5/2/1 黒色	外面黒焼	
3	赤土 土器	甕 (上製)	2号 甕類	①49.7 ②5.8 ③58.0		外面 1具ナゲ 内面 ナゲ 体部中央を打ち欠く・口縁部穿孔あり	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英を含む B:良好 C:内7.5/308/6 焼成黄褐色 外7.5/308/4 焼成褐色～ 7.5/302/1 黒色	外面黒焼	
4	赤土 土器	甕 (下製)	2号 甕類	①66.8 ②106.0 ③73.5 ④73.5		外面 ハケムナゲ 内面 ナゲ 体部中央を穿孔し	A:4mm以下の白色砂子、石英、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内7.5/306/6 焼成色 外7.5/306/6 焼成色～ 7.5/302/1 黒色	外面黒焼	
5	赤土 土器	皿	3号 甕類	①34.0 ②138.0		外面 ハケテ 内面 ココハケ後ナゲ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、黒雲母を含む、雲母を含む B:良好 C:内7.5/306/6 焼成黄褐色 外5/305/4 に近い 赤褐色～5/304/6 赤褐色	外面黒焼	
6	赤土 土器	甕	3号 甕類	①35.0 ②11.0		外面 ハケム 内面 ナゲ	A:4mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内7.5/308/4 焼成黄褐色～5/307/6 焼成 色	外面黒焼	
7	赤土 土器	甕 (上製)	4号 甕類	①47.8 ②70.8 ③10.4 ④51.2		外面 ナゲ・ハケム 内面 ナゲ	A:3mm以下の白色砂粒、雲母、4mm以下の長石を含む B:良好 C:内7.5/305/6 明赤褐色 外5/306/6 焼成 色～5/302/1 黒褐色	外面黒焼	
8	赤土 土器	甕 (下製)	4号 甕類	①77.0 ②11.0 ③171.0		外面 ハケム後ナゲ 内面 ナゲ 口縁部打ち欠く・体部中央を穿孔し	A:1mm以下の白色砂粒、3mm以上の石英を含む B:良好 C:内7.5/306/6 焼成色 外7.5/306/6 焼成色～ 7.5/302/1 黒褐色	外面黒焼	
9	赤土 土器	甕 (上製)	5号 甕類	②62.4 ③18.0 ④88.0		外面 ナゲ・黒塗り・黄丸線1条のみ丹塗り 内面 ハケムナゲ 体部中央を打ち欠く・内外面に赤色顔料 が飛び散るよう付着	A:4mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内5/306/6 焼成色、2.5/305/6 明赤褐色 外5/306/6 焼成 色～10/307/4 に近い焼成色、2.5/305/6 明赤褐色	外面黒焼	
10	赤土 土器	甕 (下製)	5号 甕類	①74.0 ②126.0 ③74.0		外面 ナゲ 内面 ナゲ	A:4mm以下の白色砂粒、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内7.5/306/6 焼成色 外5/307/6 焼成色～ 5/302/1 黒褐色	外面黒焼	
11	赤土 土器	甕 (上製)	6号 甕類	①44.0 ②44.2 ③104.6		外面 ナゲ 内面 ナゲ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、黒雲母を含む B:良好 C:内5/306/6 焼成色 外7.5/306/6 焼成色～ 5/306/6 焼成色	外面黒焼	
12	赤土 土器	甕 (下製)	6号 甕類	①50.0 ②75.6 ③12.4		外面 ナゲ 内面 指オサエナゲ	A:3mm以下の長石類を含む B:良好 C:内5/306/6 焼成色 外5/305/6 明赤褐色～5/303/1 黒褐色	外面黒焼	
13	赤土 土器	甕類 (下製)	7号 甕類	①78.2 ②103.4 ③15.2		外面 ナゲ 内面 ナゲ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内7.5/306/4 に近い焼成色～7.5/304/1 焼成 色 外5/306/6 焼成色～5/302/1 黒褐色	外面黒焼	
14	赤土 土器	甕	8号 甕類	①72.6 ②106.1 ③12.3 ④77.0		外面 ナゲ・ハケム・口縁部黒塗り 内面 ナゲ	A:5mm以下の白色砂粒、3mm以下の長石、4mm以下 の石英を含む B:良好 C:内7.5/306/6 焼成色 外 5/306/6 焼成色～5/303/1 黒褐色	外面黒焼	
15	赤土 土器	甕 (上製)	9号 甕類	①48.0 ②38.0 ③100.0		外面 ハケム指オサエナゲ 内面 ハケム指オサエナゲ	A:1mm以下の白色砂粒、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内7.5/306/4 に近い焼成色 外7.5/308/4 焼成黄褐色～1.5/305/3 黒褐色	外面黒焼?	
16	赤土 土器	甕 (下製)	9号 甕類	①60.1 ②36.3 ③12.5 ④35.8		外面 ナゲ・ハケム 内面 ナゲ・ハケム	A:2mm以下の白色・赤色砂子、石英、1mm以下の長 石を含む B:良好 C:内10/306/4 に近い黄褐色 外 10/306/6 明赤褐色～10/302/1 黒色	外面黒焼	
17	赤土 土器	甕	10号 甕類	①67.2 ②107.6 ③11.6 ④71.4		外面 ナゲ・黒塗り 内面 ナゲ	A:4mm以下の白色砂粒、雲母、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内5/306/6 焼成色 外5/306/6 焼成色～ 5/303/1 黒色	外面黒焼	
18	赤土 土器	甕 (下製)	11号 甕類	②39.7 ③10.7		外面 ハケム指オサエナゲ 内面 ハケム指オサエナゲ	A:4mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5/307/6 焼成色～7.5/302/4 に近い焼成色 外 2.5/305/3 に近い赤褐色～10/308/4 焼成黄褐色～ 10/304/1 焼成色	外面黒焼	
19	赤土 土器	甕	12号 甕類	①69.2 ②101.5 ③11.2 ④71.0		外面 ナゲ 内面 ナゲ	A:4mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内7.5/306/6 焼成色 外5/306/6 焼成色	外面黒焼	
20	赤土 土器	甕 (上製)	13号 甕類	②49.0 ③12.6 ④70.8		外面 ハケムナゲ・黒塗り 内面 ナゲ 体部中央を打ち欠く	A:5mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5/305/6 明赤褐色 外5/306/6 焼成色～ 5/302/1 黒褐色	外面黒焼	
21	赤土 土器	甕 (下製)	13号 甕類	①66.0 ②106.0 ③12.5 ④76.0		外面 ナゲ・石英、1mm以下の石英を含む 内面 ナゲ	B:良好 C:内7.5/305/6 明赤褐色 外7.5/305/6 明赤 褐色～7.5/303/1 黒褐色	外面黒焼	
22	赤土 土器	甕 (下製)	14号 甕類	②38.0 ③10.2		外面 ハケムナゲ 内面 指オサエナゲナ	A:5mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内5/303/3 に近い赤褐色～7.5/307/4 に近い焼成 色 外7.5/303/1 黒褐色～2.5/304/2 焼成褐色～7.5/304/4 に近い焼成色	外面黒焼	

第2表 出土遺物観察表2

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(m)	①④探査範囲②成体(最大径) ③(復元図)・残存部	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:施文 C:色調			備考
							A:胎土	B:施文	C:色調	
23	赤土土器	甕	15号 甕箱	①72.0 ②103.4 ③13.8 ④72.8		外面 ハケム口縁部凹線り 内面 ナデ	A:3mm以下の白色粒、赤色粒、長石、石英、角閃石を含む B:良好 C:内7.5V36.6 褐色～5V37.6 褐色 外7.5V36.8 褐色～黒色		外面黒染	
24	赤土土器	鉢 (土製)	16号 甕箱	①82.0 ②133.0		外面 ナデ・基施り 内面 ナデ	A:3mm以下の長石、石英を多く含む B:良好 C:内5V36.6 褐色～5V37.1 黒褐色 外5V37.6 褐色～5V37.1 黒褐色～5V37.1 黒色		外面黒染	
25	赤土土器	甕 (下製)	16号 甕箱	①70.4 ②115.4 ③15.6 ④70.4		外面 ナデ・土具ナデ 内面 ナデ・土具ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内5V36.6 褐色～7.0V37.2 明褐色 外7.5V37.4 に黒い褐色～5V36.6 褐色		外面黒付着	
26	赤土土器	甕	17号 甕箱	②79.2 ③114.2		外面 ナデ 内面 ナデ・基施り	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内2.5V36.8 褐色～2.5V37.1 暗赤灰色 外2.5V37.5 明赤褐色～2.5V37.1 暗赤灰色		外面黒染	
27	赤土土器	甕 (土製)	18号 甕箱	①61.8 ②83.6 ③12.3 ④66.3		外面 ハケム下ナデ筋。 内面 ハケム下ナデ筋。	A:1mm以下の白色砂子、石英を含む B:良好 C:内7.5V37.4 に黒い褐色 外7.5V37.6 褐色～7.5V37.1 黒		外面黒染	
28	赤土土器	甕 (下製)	18号 甕箱	①66.6 ②96.8 ③13.6 ④66.4		外面 ナデ・土具ナデ 内面 ナデ・土具ナデ	A:3mm以上の白色砂子、石英を含む B:良好 C:内7.5V36.6 褐色 外10V36.6 明褐色～30V37.1 黒		外面黒染	
29	赤土土器	鉢 (土製)	19号 甕箱	①75.6 ②47.5 ③13.7		外面 ハケムナデ・基施り 内面 ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5V37.2 に黒い褐色～7.5V37.5 褐色 外10V37.3 赤褐色～10V36.8 赤褐色～30V37.2 赤黒色		外面黒染	
30	赤土土器	甕 (土製)	19号 甕箱	①71.5 ②107.5 ③15.8 ④67.7		外面 ナデ・土具ナデ・口縁部凹線りナデ 内面 ナデ・土具ナデ	A:3mm以下の白色砂子、4mm以下の赤石を含む B:良好 C:内7.5V36.6 褐色 外7.5V36.8 褐色～7.5V37.1 黒褐色		外面黒染	
31	赤土土器	甕 (下製)	20号 甕箱	①92.4		外面 下位ハケム下ナデ筋。 内面 ハケム	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5V37.6 褐色 外5V37.6 褐色～4V37.2 暗灰色		外面黒染	
32	赤土土器	20号 甕箱	②102.0 ③179.0		外面 ナデ 内面 ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内2.5V36.6 褐色 外5V36.6 褐色～5V37.1 黒褐色		外面黒染		
33	赤土土器	壺 (土製)	21号 甕箱	②128.0 ③113.0 ④37.2		外面 ナデ・丹塗り 内面 ナデ 体部中央付近に穴	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内7.5V37.2 明褐色 外10V36.6 明赤褐色～5V36.3 に黒い褐色		内面下部黒染	
34	赤土土器	甕 (下製)	21号 甕箱	①32.5 ②56.2 ③9.3 ④23.9		外面 磨製不明 内面 ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内5V37.2 4 に黒い褐色 外5V37.6 褐色		外面黒染	
35	赤土土器	甕 (下製)	22号 甕箱	②177.0 ③180.0		外面 ココナデ・基施り 内面 ナデナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5V37.6 褐色～2.5V37.4 暗灰色 外5V36.8 褐色～2.5V36.6 褐色～7.5V37.3 に黒い褐色		底面黒染	
36	赤土土器	甕	23号 甕箱	②144.0		外面 ナデ 内面 ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、角閃石、雲母を含む B:良好 C:内7.5V36.4 に黒い褐色 外10V37.4 に黒い褐色～7.5V37.6 褐色		外面黒染	
37	赤土土器	甕 (土製)	24号 甕箱	②38.2 ③104.0		外面 ナデ・基施り 体部中央に2本の方形突帯 内面 ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内2.5V37.5 明赤褐色 外2.5V37.5 明赤褐色～2.5V37.3 に黒い赤褐色		外面黒染	
38	赤土土器	甕 (下製)	24号 甕箱	①49.4 ②79.0 ③11.3 ④39.6		外面 ナデ・短ス・基施り 内面 ナデ	A:1mm以下の白色砂子、長石を含む B:良好 C:内7.5V37.6 褐色 外7.5V37.6 明褐色		外面黒染	
39	赤土土器	山口直 2号甕箱 墓坑埋土	②13.1		外面 ナデ・口縁部上面に短ス・口縁部凹線り 内面 ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外2.5V36.8 褐色		外面黒染		
40	赤土土器	甕 2号甕箱 墓坑埋土	②19.0		外面 ナデ・外面丹塗り 内面 ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内5V36.6 褐色 外10V37.7 赤色		外面黒染		
41	赤土土器	甕 13号甕箱 墓坑埋土	①100.0 ②17.1		外面 ナデ 内面 ナデ・口縁部内面土具残あり 口縁部内面丹塗り	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内7.5V37.6 褐色 外5V37.6 褐色		口縁部内面黒染		
42	赤土土器	甕 13号甕箱 墓坑埋土	②16.15		外面 ハケム外面丹塗りナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内7.5V37.6 明赤褐色～5V36.6 褐色 外7.5V37.8 黄褐色～2.5V37.6 明赤褐色～7.5V37.1 黒褐色～7.5V37.1 黒褐色		外面黒付着		
43	赤土土器	山口直 13号甕箱 墓坑埋土	②10.5		外面 ナデ・丹塗り・口縁部凹線り目 内面 ナデ・丹塗り内外面ナデ	A:4mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外2.5V37.6 明赤褐色		外面黒染		
44	赤土土器	蓋?	SP1 ①11.8 ②10.1		内面 ナデ 外面 ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5V37.6 明赤褐色 外2.5V36.6 褐色		把手部黒染あり		

IV. 瑞穂遺跡第 11 次調査出土人骨について

舟橋 京子^{1)・2)}・米元 史織^{2)・3)}・田淵 朱莉⁴⁾

- 1) 九州大学比較社会文化研究院
- 2) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
- 3) 九州大学総合研究博物館
- 4) 九州大学地球社会統合科学府

1. はじめに

福岡県大野城市瑞穂遺跡の第 11 次調査において、第 8 次調査出土甕棺墓地と一連の墓域と考えられる甕棺から弥生時代に所属する人骨が出土し、調査を担当した大野城市が人骨の検出・取り上げを行った。人骨は取り上げ後、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターへと搬送され、本センターにおいて整理・分析を行った。以下に結果を報告する。

分析にあたって、歯牙の咬耗度は栃原 (1957) を用い、性判定には、頭蓋・骨盤について Buikstra and Ubelaker (1994) の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成 2』(九州大学医学部第二解剖学教室編、1988) 記載の区分に従い、乳児 0-1 歳、幼児 1-6 歳、小児 6-12 歳、若年 12-20 歳、成年 20-40 歳、熟年 40-60 歳、老年 60 歳以上、成人 20 歳以上 (詳細は不明) とする。

なお、人骨資料は現在、九州大学比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

2. 人骨の出土状態

【K2 号人骨】

合わせ口の甕棺内部から人骨がまとまって出土している。下甕の胸部付近から長管骨片が出土している。保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K4 号人骨】

合わせ口の甕棺から人骨が出土している。下甕中央よりやや胸部付近から頭蓋骨が出土している。頭蓋骨は頭頂部を南西側、顔面を北側に向けた状態で出土している。頭蓋骨の北側からは長管骨片が出土している。頭蓋骨の直上からは上甕骨片が出土している。保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K5 号人骨】

合わせ口の甕棺から人骨が出土している。下甕底部側から頭蓋骨片が頭頂部を下、顔面を西に向けた状態で出土している。頭蓋骨の下位から南西側にかけて椎骨が出土している。これらの椎骨の東西から左右の肋骨が出土している。これら椎骨の南西側からは下肢が出土している。最も北東側から左右寛骨が出土している。右寛骨の直下西側から、右大腿骨および右脛骨が出土している。左寛骨の西側からは左大腿骨および左脛骨が出土している。左右の下肢は股関節および膝関節を強屈し膝を右側に倒した状態である。右股関節はほぼ関節状態であり、左右の膝関節は軟部組織の腐朽

に伴いや離れた位置から出土している。以上のことから、本個体は頭位を北東にし仰臥屈葬で膝を立てた状態で埋葬されていたものが、軟部組織の腐朽に伴い膝が右側に倒れ込んだと推定される。

【K6号人骨】

甕棺から人骨が出土している。甕棺の最も口縁部側から頭蓋片が出土している。頭蓋は顔面を南、頭頂部を西側にした状態で出土している。頭蓋骨の直下北東側からは前腕が長軸を東西にした状態で出土している。さらにその下からは寛骨が出土している。頭蓋骨の北東側からは下肢が長軸を北西—南東にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位を南にし、下肢を股関節・膝関節で強屈した姿勢であったと推定される。

【K7号人骨】

甕棺から人骨が出土している。甕棺の底部付近から頭蓋片が出土している。頭蓋は顔面を南、頭頂部を下にした状態で出土している。頭蓋の南側からは長管骨が複数出土している。保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K8号人骨】

合わせ口の甕棺の下甕から下肢が出土している。脛骨が長軸を北西—南東にし、前面が東を向いた状態で出土している。脛骨の西側からは寛骨と推定される骨が出土している。また、上甕からは左右の大腿骨が、いずれも近位を北東に、遠位を南西に向けた状態で出土している。保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K9号人骨】

合わせ口の甕棺から人骨が出土している。下甕中央から頭蓋片が散乱した状態で出土している。その西側の下甕中央部からは下肢が出土している。下肢骨は左右の大腿骨・脛骨が長軸を東西にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位を南にし、下肢を股関節および膝関節で強屈した姿勢であったと考えられる。

【K12号人骨】

合わせ口の甕棺から人骨が出土している。下甕中央から部位同定困難な破片が複数出土している。保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K13号人骨】

合わせ口の甕棺から人骨が出土している。下甕中央から、下肢が出土している。最も甕の口縁側からは寛骨が出土し、その北西側からは足根骨および趾骨片が複数出土している。

保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明であるが、下肢の位置関係から頭位南東の可能性が考えられる。

【K16号人骨】

合わせ口の甕棺から人骨が出土している。下甕中央付近から、人骨が出土している。最も底部側からは頭蓋骨が出土している。頭蓋の南東側から左上腕骨が、南西側から長軸を南北にした状態で出土している。左右の上腕骨の内側からは前腕片が出土している。これら上肢の南側からは、下肢

第3表 瑞穂遺跡第11次調査出土土人骨一覧

遺構番号	保存状態			年齢	性別
	頭蓋	歯牙	四肢		
K2	—	—	×	不明	不明
K4	×	×	×	成人	不明
K5	×	—	△	不明	不明
K6	×	△	×	熟年	不明
K7	×	×	×	熟年	不明
K8	—	—	×	不明	不明
K9	△	—	×	不明	不明
K12	×	—	×	不明	不明
K13	—	—	×	不明	不明
K16	△	△	△	熟年	不明
K17	—	—	×	不明	不明
K19	×	×	—	不明	不明
K20	—	—	×	不明	不明
K24	△	△	△	成年	女性

保存状態 一：遺存していない、×：不良、△：やや良好、
○：良好

が長軸を北東—南西に向けた状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位を北に上肢は強屈し下肢を屈曲した状態で埋葬されたと推定される。

【K17号人骨】

合わせ口の甕棺より人骨が出土している。下甕底部付近から下肢と推定される長管骨が長軸を北東—南西に揃えた状態で複数出土している。

保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K19号人骨】

合わせ口甕棺の下甕から歯牙片及び椎骨片・肋骨と推定される骨粉と小骨片がまとめて出土している。

保存状態が良くないことから本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K20号人骨】

合わせ口甕棺の下甕の胴部下半付近から、下肢と推定される長管骨が長軸を東西にした状態で出土している。これらの長管骨のうち、南側から大腿骨が近位を西、遠位を東にした状態で出土している。大腿骨の北側からは左右脛骨が近位を東、遠位を西にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位を南東にして下肢を強屈した屈葬であると推定される。

【K24 号人骨】

合わせ口裏棺の下甕から人骨が出土している。左右の下肢骨が長軸を東西方向にした状態で出土しており、その間から頭蓋骨が出土している。頭蓋骨は脳頭蓋の頭頂骨より後方部分が、頭頂部を下にし後頭部を南東に向けた状態で出土しており、その上から前頭骨が内面を上にした状態で出土している。

頭蓋の南側からは右下肢が出土しており、北側からは左下肢が出土している。左右下肢は、大腿骨が近位を西、遠位を東にした状態で出土しており、大腿骨の下からは脛骨が近位を東、遠位を西にした状態で出土している。左右脛骨の遠位付近直下からはそれぞれ足根骨と中足骨が出土している。

以上の出土状況から、本個体の頭位は西であり、下肢は股関節を伸展し膝関節を強屈し下腿を大腿骨の下に織り込んだ仰臥屈葬の状態で埋葬されており、軟部組織の腐朽に伴い頭部が左右下肢の間に転落したと推定される。

3. 形質的特徴（第3表）

出土人骨の保存状態および性別や年齢については第4表にまとめた。保存状態が比較的良好なK6およびK16、K24号人骨のみ以下にその特徴を記載する。

【K6号人骨】

①保存状態 本個体の保存状態は不良である。頭部は上顎骨片と部位同定困難な頭蓋片及び歯牙が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

.									
/	/	M ¹	P ²	P ¹	C	/	/	/	/	C	/	P ²	/	/	/
/	/	/	P ₂	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			.												

(○歯槽解放、×歯槽閉鎖、/欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c齶歯 以下同様)

この他にも部位同定困難な前腕片、寛骨片及び左右大腿骨片が遺存している。左右大腿骨片はいずれも小転子付近が遺存している。

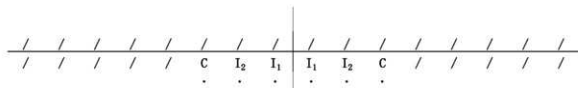
②年齢・性別 本個体の年齢は、歯牙咬耗度が栃原（1957）の2°bであることから熟年と推定される。性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

【K16号人骨】

①保存状態 本個体の保存状態は不良である。頭部は、後頭骨の左アステリオン付近と部位同定困難な頭蓋片及び歯牙が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

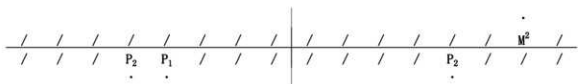
四肢骨は、右大腿骨骨体中央部の粗線付近片と右脛骨の骨体部後面付近片が遺存している。この他にも部位同定困難な上腕および下肢の骨片が遺存している。

②年齢・性別 本個体の年齢は、歯牙咬耗度が栃原（1957）の2°bであることから熟年と推定される。性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。



【K24 号人骨】

①保存状態 本個体の保存状態は比較的良好である。頭蓋骨は前頭骨およびラムダ縫合付近の左右頭頂骨と左右側頭骨の乳様突起付近および後頭骨のラムダ縫合付近片が遺存している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。



下肢は左右大腿骨および脛骨の骨体部片が遺存している。また、左右の足根骨および中足骨が数点遺存している。

②年齢・性別 性別は、眼窩上隆起および乳様突起が発達しておらず大腿骨粗線も発達していないことから女性と判定される。年齢は、頭蓋の主要三縫合のうち、残存部位に限っては矢状縫合およびラムダ縫合の外板は開放しており、内板は閉鎖しかけている。また歯牙咬耗度が橋原（1957）の 2° a であることから、本個体は成年と推定される。

③特記事項 残存歯牙のうち左上顎第 2 大臼歯の咬合面に C1 の齶歯が認められる。

4. まとめ

瑞穂遺跡第 11 次調査において、弥生時代の甕棺から計 14 体の人骨が出土した。保存状態が良好ではなかったため、年齢・性別の明らかな個体は少なかったが、成年女性 1 体および成人 4 体が含まれることが確認された。14 体中形態計測可能な個体はなく、当該地域における今後の資料の増加が待たれる。

謝辞

本報告を行うにあたり、大野城心のふるさと館の山元瞭平氏・石川健氏には様々なご配慮をいただいた。深謝したい。

参考文献

- Buikstra, J. E., & Ubelaker, D. (1994). Standards for data collection from human skeletal remains. Arkansas Archeological Survey Research Series no. 44.
 橋原博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31 pp.607-656

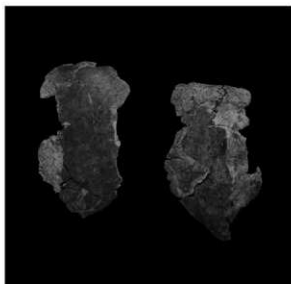
写真1 瑞穂遺跡第11次調査出土土人骨



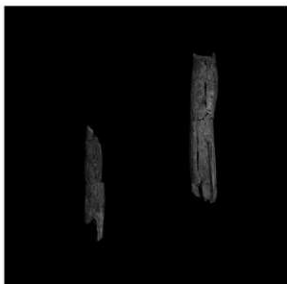
K24 号人骨前頭骨



K5 号人骨左右大腿骨



K24 号人骨左右アステリオン付近の頭頂骨・側頭骨・後頭骨



K24 号人骨左右大腿骨



K24 号人骨歯牙

V. 瑞穂遺跡第 11 次調査出土甕棺および粘土の化学組成の比較

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

足立達朗・田尻義了

はじめに

瑞穂遺跡ではこれまで東側に隣接する 7 次や 8 次調査において弥生時代の甕棺墓が検出されており、今回の 11 次調査で分析を行った甕棺も一連の墓群であると考えられている。今回は遺跡出土の甕棺と目張りの粘土および遺跡採取の粘土の化学組成分析を実施して、それらの間の関係性を探ることを目的とした。今回分析に用いた試料は第 4 表の 10 点である。

分析手法

遺跡から採取した粘土および土器は、110℃の恒温乾燥炉にて 1 週間程度乾燥させたのち粉末にし、分析に使用した。主要元素および微量元素組成については、九州大学・比較社会文化研究院設置の波長分散型蛍光 X 線分析装置 (XRF, リガク製・ZSX Primus II) を使用し、試料と融剤が 1 : 2 の低希釈率ガラスビードを用いて分析した。試料調整法および分析条件の詳細は、中野ほか (2012) に従った。また、希土類元素を含む一部の微量元素は、九州大学・比較社会文化研究院設置の誘導結合プラズマ質量分析計 (ICP-MS, Agilent 製・7500cx) を使用して、XRF 分析に用いたものと同じガラスビードに対しレーザーアブレーションシステム (LA, New Wave Research 製・UP-213) による試料導入を実施して分析した。分析条件の詳細は、Nakano et al. (2010) に従った。

結果とまとめ

得られた結果を第 5 表と第 20、21 図に示した。第 20、21 図を見てみると、K10 甕棺 (試料 8) と K18 上甕 (試料 9)、K18 下甕 (試料 10) はどの元素においても近い化学組成領域に取まる。このことは、これらの甕棺は同じ胎土を素材としていることを示している。しかし、それらの甕

第 4 表 瑞穂遺跡第 11 次調査出土甕棺と関連資料の一覧

試料 1	K2	目張り粘土
試料 2	K10	目張り粘土
試料 3	K18	目張り粘土
試料 4	K21	目張り粘土
試料 5	K24	目張り粘土
試料 6	K16	墓坑埋土
試料 7		地山
試料 8	K10	甕棺
試料 9	K18	上甕
試料 10	K18	下甕

棺を目張りしていた粘土である試料 2 (K10 目張り粘土) および試料 3 (K18 目張り粘土) は甕棺とは異なる組成を示すことが分かる。このことは、甕棺の胎土と目張りに使用された粘土は異なるものであることを示している。ほかの粘土と比較しても、甕棺と一致するものは見受けられない。試料 6 (K16 墓坑埋土) はいくつかの元素で近い値を示すが、大きく外れる元素も多く、これらの甕棺の素材とは言い難い。試

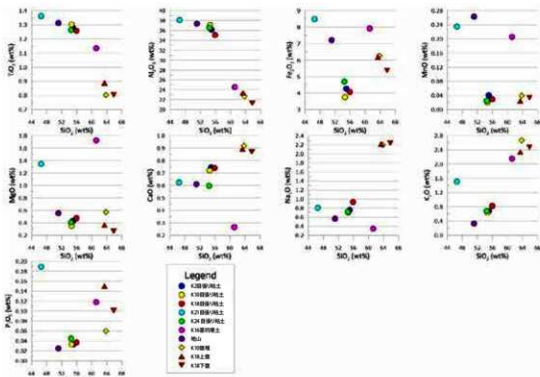
第5表 瑞穂遺跡第11次調査出土土壌および粘土の化学組成

成分	試料1 K2目張り粘土	試料2 K10目張り粘土	試料3 K18目張り粘土	試料4 K21目張り粘土	試料5 K24目張り粘土	試料6 K16焼成土	試料7 地山	試料8 K10糞棺	試料9 K18上糞	試料10 K18下糞
(wt%)										
S D ₂	55.00	54.61	55.91	46.51	54.47	61.17	51.10	63.74	63.35	65.80
T D ₂	1.28	1.30	1.26	1.36	1.26	1.14	1.31	0.80	0.89	0.80
Al ₂ O ₃	36.16	37.04	35.07	38.06	36.55	24.52	37.34	22.67	23.37	21.28
Fe ₂ O ₃	4.26	3.75	4.07	8.48	4.69	7.93	7.22	6.28	6.18	5.40
M nO	0.04	0.02	0.03	0.24	0.03	0.21	0.26	0.04	0.02	0.03
M gO	0.43	0.35	0.48	1.34	0.41	1.73	0.56	0.57	0.36	0.27
CaO	0.75	0.72	0.74	0.62	0.60	0.27	0.61	0.92	0.89	0.87
Na ₂ O	0.76	0.71	0.93	0.81	0.72	0.35	0.57	2.19	2.21	2.24
K ₂ O	0.68	0.64	0.82	1.51	0.69	2.16	0.33	2.67	2.34	2.48
P ₂ O ₅	0.03	0.03	0.04	0.19	0.05	0.12	0.03	0.06	0.15	0.10
Total	99.38	99.18	99.34	99.12	99.45	99.57	99.32	99.94	99.77	99.27
(ppm)										
V	74.30	69.57	76.06	108.00	79.10	129.31	68.16	73.90	67.53	65.32
Cr	19.13	22.47	21.63	47.69	21.59	84.63	11.73	30.49	35.27	30.32
Ni	7.57	9.50	7.92	38.35	10.45	52.86	21.88	10.45	7.72	9.44
Cu	8.78	6.47	7.87	15.83	7.72	18.15	5.77	16.78	15.53	14.24
Zn	96.55	72.21	100.70	130.25	100.46	115.57	158.12	90.46	83.95	80.91
Ga	38.97	41.38	39.50	44.21	40.24	30.13	40.32	28.90	30.07	26.11
Rb	34.63	38.25	43.61	93.78	36.74	163.02	21.08	110.70	76.75	93.04
Sr	147.38	161.28	151.53	131.30	122.75	71.96	138.42	183.06	176.51	180.59
Y	36.94	11.14	33.68	42.91	23.95	39.54	58.24	23.16	26.56	27.93
Zr	497.69	487.88	472.94	500.65	493.76	308.47	529.75	339.80	331.82	303.61
Nb	26.99	26.08	26.82	30.39	26.76	21.92	27.67	19.17	21.10	19.66
Ba	1052.99	996.76	953.20	524.17	880.44	543.39	1884.52	619.84	474.72	578.62
La	47.16	9.24	38.23	51.75	28.55	42.73	63.29	30.89	26.29	30.69
Pb	44.07	44.83	43.23	49.09	46.81	37.08	42.67	25.70	26.62	25.18
Th	28.36	27.93	27.84	30.11	28.89	20.56	29.18	12.18	13.14	10.89
LOI (wt%)	11.60	11.83	11.09	14.82	11.77	10.58	11.93	5.14	4.07	4.75

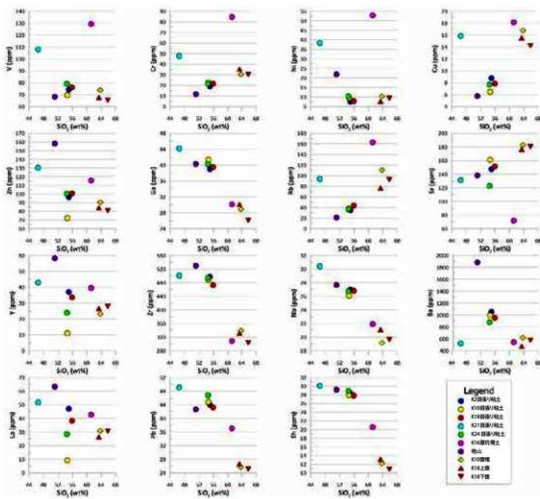
料1 (K2目張り粘土)、試料2 (K10目張り粘土)、試料3 (K18目張り粘土)、試料5 (K24目張り粘土)は、試料7 (地山)と粘土と多くの元素で近い値を示し、同一のトレンドを形成する。このことは、これらの粘土は在地の地山で採取された粘土であると言える。そうすると、これらの粘土とは組成の異なる糞棺の胎土は、別の地点あるいは地域で採取されたものを素材としていと考えられる。

引用文献

- 中野伸彦・小山内康人・足立達朗・米村和紘・吉本紋・Nugroho SETIAWAN 2012 「蛍光X線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・希土類元素の迅速定量分析」『比較社会文化』第18巻, pp.81-94.
- Nakano, N., Osanai, Y., Adachi, T. 2010 Major and trace element zoning of euhedral garnet in high-grade (> 900 ° C) mafic granulite from the Song Ma Suture zone, northern Vietnam. Journal of Mineralogical and Petrological Sciences. 105 : 268-273.



第 20 図 瑞穂遺跡第 11 次調査出土甕棺および粘土の微量元素のハッカー図



第 21 図 瑞穂遺跡第 11 次調査出土甕棺および粘土の主要元素のハッカー図

VI. 総括

1. 遺構の変遷

今回の調査では、甕棺墓をはじめとする弥生時代の墳墓群を確認した。これらは、隣接する瑞穂遺跡7・8次調査で確認された弥生時代墓地と一連のものであり、墓域の広がりや変遷を明らかにする上で重要な成果を得た（第22図）。

墓地の変遷については、既往の報告において詳細に検討されており、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて連続と営まれたことが明らかにされている（上田・澤田編2022）。この報告では、6つの段階（時期）に基づき墓地の変遷が整理されていることから、今回も同様の区分を用いて時期的変遷を確認する。また、弥生墓地の構造的な理解については、溝口孝司氏による一連の研究成果を参照した。

【1段階（中期初頭前後＝KⅡa式期前後）】 当該期の遺構は確認されていない。瑞穂墓地の形成が始まる時期にあたり、7・8次調査では甕棺墓や木棺墓が確認されている。

【2段階（中期前半～中頃前後＝KⅡb・Ⅱc / KⅢa式期）】 7・8次調査地では、二列埋葬墓が展開する。本調査地にKⅡb・Ⅱc式期のものはなく、KⅢa式期から甕棺を用いた埋葬が始まる。これらは、7・8次調査地から続く二列埋葬墓の延長部に当たる。当該型式の甕棺は7・8次調査地にはほとんど見られないことから、時期が下るに連れて、列が西側へと延伸したものと考えられる。なお、列は調査区南側で確認した微高地の縁辺部に沿う形で、西側に若干湾曲している。甕棺の主軸を見ると、列に対して軸を描えるもの（K4・K19）と軸に対して直交するもの（K7・K17）が存在する。

【3段階（中期後半～後期初頭＝KⅢb・KⅢc / KⅣa式期）】 本調査地において造墓数が最も多くなる段階である。7・8次調査では、前段階の列墓を踏襲する位置に、甕棺墓が近接して埋設される状況（集塊状墓）が確認されており、本調査地でも同じ様相を示す。また、墓地全体を見渡すと、当該期の墳墓は西側に集中している状況が読み取れる。K2・K15→K1、K12→K8・K13などは近接し、かつ挿入方向を同じくする点から、系列を意識したものともみられ、数世代にわたり造墓が継続したと考えられる。

合わせ口の甕棺墓であるK5には大型の甕が用いられており、上甕は胴部中で打ち欠かれているものの、胴部径が80cmを超える大型品で、突帯部分が赤彩されるなど他の甕棺に比べて特異な印象を受ける。また、当該期における甕棺の口縁下にめぐる突帯は、三角形のものが多く、本

第6表 瑞穂遺跡第11次調査甕棺型式一覧

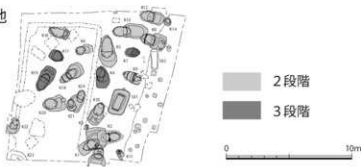
段階	甕棺型式	遺構	
2段階	KⅢa式	K4・K7・K17・K19	
3段階	KⅢb式	K2・K12・K15・K16・K20・K22	
	KⅢc式	K1・K6・K8・K9・K13・K18	
	KⅣa式	K10・K21・K24	
		K3・K5・K11・K14	

※合わせ口甕棺墓の上下に型式差が認められる場合は、新しい型式を優先

7・8次調査地



11次調査地



第22図 瑞穂遺跡墓地変遷図 (1/300)

調査地点の資料には台形のものがある一定数存在する。台形突帯を有する甕棺は、福岡市月隈地域に分布することが知られているもの⁽¹⁾。今回は類例の把握や分布状況の検討まで至らなかった。こうした特徴は、地域性を示す属性の可能性も示唆されることから、今後検討が必要である。

なお、木棺墓であるSX01からは須玖Ⅱ式の土器片が出土しており、当該期に位置付けられる。さらに、KⅢb式期であるK2の墓坑埋土から出土した土器とSX01出土土器が接合したことから、両者は近い時期の所産と想定される。

KⅣa式期まで甕棺墓による埋葬が続くものの、造墓数は減少傾向にある。

【4段階(後期前半～中頃前後)】 当該期に位置付けられる明確な墳墓はない。7・8次調査地では、土坑墓による埋葬が継続しており、本調査地で確認した土坑墓 SX02 については、出土遺物がなく時期不明ではあるものの、形態的類似性から当該期に位置付けられる可能性がある。

なお、7・8次調査地では、続く5段階(後期後半～末)においても石棺墓や石蓋土坑墓といった新たな墳墓を用いた埋葬が継続するが、本調査地では全く見られない。当該期の九州北部では埋葬数の減少と溝口氏の定義する区画墓Ⅲの出現から、造墓の単位集団が上位層に限定されたことが指摘されている。4段階以降の墳墓の不在は、こうした傾向にともなうものと考えられよう。

2. 成果のまとめ

以上、本調査地における墳墓の変遷について、既往の調査成果を踏まえて整理した。消長を端的に述べると、弥生時代中期中頃に二列埋葬墓の形成が始まり、中期後半には集塊状墓へと変化する。後期初頭を境に造墓は停止し、石棺墓や石蓋土坑墓といった新たな形式の墳墓へは継続しない。こうした変遷は、従来把握されていた墓地構造の中で捉えることができ、瑞穂墓地の形成過程をより具体的に示す重要な成果と言えるだろう。

また、本墓地の主な特徴については、既往の報告において下記のようにまとめられている。

1. 長期的かつ継続的に墓地が営まれ、弥生墳墓から古墳への変遷過程を明確に示す。
2. 区画墓Ⅰ・Ⅱや厚葬墓の不在、列墓の残存性、系列墓の不安定さ、区画墓Ⅲの後出など、先進的な奴国中枢域に対して、周縁的な様相を示す。
3. 牛頸川流域に展開する複数の集落(村下遺跡・石勺遺跡・駿河A遺跡・御供田遺跡)の構成員が共同で営んだ墓地である。

上記の特徴については、今回の調査成果を加えても特に変更すべき点はない。今回新たに確認された甕棺墓やその他の墳墓を含めると、瑞穂墓地は100基を超える墳墓により構成されており、規模・継続性ともに牛頸川流域を代表する墓地であることがより鮮明になったと言える。

また、新たな試みとして、甕棺と目張り粘土、地山等の関係性を明らかにするために化学分析を実施した(V章参照)。化学組成は、目張り粘土と地山の粘土は近い値を示し、これらと甕棺の胎土は明確に異なる値を示した。こうした結果は、目張り粘土が遺跡の周辺で採取されたこと、甕棺は別の地域(地点)で採取された粘土を素材としていることを示唆する。分析点数が限られるため、具体的な言及は難しいが、埋葬までのプロセス(甕棺や目張りに用いる粘土の調達といった埋葬に必要な物資の調達過程)を解明する上で重要な成果と言え、今後の分析例の蓄積に期待したい。

【註】

- (1) 溝口孝司氏ご教示。

【参考文献】

- 上田龍児 澤田康夫編 2022『瑞穂遺跡5』大野城市文化財調査報告書第200集 大野城市教育委員会
溝口孝司 1998「カメ棺墓の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』平成10年度福岡市博物館企画展図録
溝口孝司 2000「墓地と埋葬行為の変遷—古墳時代の開始の社会的背景の理解のために—」『古墳時代像を見なおす』青木書店

3. 北部九州の弥生時代の墓制の中における瑞穂墓地の位置

九州大学大学院比較社会文化研究院 溝口孝司

I. はじめに

大野城市瑞穂墓地の弥生時代墓地と関連遺構群は、一遺跡の中で、北部九州地域、具体的に絞り込むと脊振山系を囲む地域に特異に展開した甕棺墓、それとともに墓地を形成したその他の埋葬施設、関連遺構群から構成される〈墓地〉の、葬送行為というコミュニケーション行為の場としての変遷を辿ることができるという、稀有な事例である。このことは、この場所に死者を葬ることを通じて、自らの社会的位置を確認・構築し、さまざまな位相にわたる集団の構成員としてそれらの維持・再生産に関与した人々の「存在のあり方」と「それを取り巻き、それによって構成・再生産された社会」のあり方、それらの変容の歴史がここにその痕跡を遺している、ということの意味する。そのような観点から、以下、考古学的に復元された、北部九州という圏域に展開した〈葬送コミュニケーション〉の歴史の変遷過程に認められる四つの相／フェイズの様相を記述し、その中に瑞穂墓地（以降「瑞穂墓地」と呼称する）の調査成果を位置付けるとともに、瑞穂墓地に死者を葬った人々が生きた社会とそれらの関わりの具体像に迫りたい¹⁾。以下、瑞穂墓地に関わる記述には下線を引く。

II. 四つのフェイズの概要と瑞穂墓地の様相

A. フェイズ1: 弥生早期～1期（瑞穂墓地形成開始以前）

弥生早期～1期の墓地空間構造形成原理には、〈系列形成指向〉と〈列形成指向〉が併存し、墓地ごとに異なる展開を見せつつ全体として前者から後者へと移行する（第23図A）。本段階の埋葬施設には土坑墓、木棺墓、支石墓／配石墓、甕棺墓がある。甕棺墓は当初は乳幼児埋葬容器の場合が多く、1期の末葉になり成人用埋葬容器として形式的な分化が完成する²⁾。

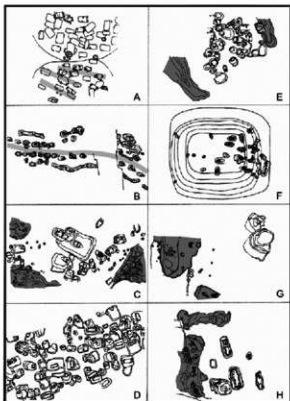
〈系列形成指向〉は既存の埋葬施設に近接して新たな埋葬施設を意図的に設置することを繰り返すことにより物象化され、福岡県糸島市新町遺跡形成過程の前半に典型的にみられる。墓地類型としては〈系列墓〉と略記する。系列の背後には墓地全体の形成に参画する規模・内容の集団よりも小規模な集団の存在が想定される。これに対し、列形成指向は既存の埋葬施設と長軸線を共有しつつ、一定の距離を空けて新たな埋葬施設を設置することを繰り返すことにより物象化され、新町遺跡形成過程の後半に典型的にみられる。福岡県福岡市下月隈天神森遺跡のように、帯状空間に沿って線状に二列に埋葬施設が配置される事例が1期の末葉から増加する。このような埋葬施設の二列配置により特徴付けられる墓地を〈列形成指向墓b（列墓b）〉、前者のように数列をなすものを〈列墓a〉と筆者は略記する。

瑞穂墓地の形成は、続くフェイズ2から本格化する。

B. フェイズ2: 弥生Ⅱ期～Ⅲ期

弥生Ⅱ期からⅢ期にかけては、脊振山地を取り巻く地域全域で、ほぼ全ての墓地が〈列形成指向〉に準拠して形成されるようになる。すなわち、このフェイズに形成された墓地、ないしは墓域はほぼ全て〈列墓a〉もしくは〈列墓b〉（上述）の範疇に属する（第23図B）。

本フェイズの〈列墓b〉は、本フェイズの集落の典型



第23図 墓地の諸類型

的パターンである、個々の集落を構成する複数の居住集団（近藤義郎氏の＜単位集団＞に相当する）の個々に近接して営まれる小規模なものと、多く＜中心地的大型集落＞に営まれ、それを構成する複数の居住集団のいずれにも付属しないものの二者が存在する。瑞穂墓地の場合には後者に属する可能性が存在する（後述）。両者ともに道路状の帯状空間を挟んで埋葬施設が二列に延々と線状に配置され、多くの場合、それらの外側に土坑群、もしくは溝が配置される。それらの中には壙形土器を中心として、完全に復元されない土器群が置かれる（／放置される）ことが多い。詳細な形成過程の復元成果によれば、これらは比較的ランダムに当初はかなりの間隔を空けて配置され、その後累々たる線状配置へと発展する場合（＜列墓 b-1＞と仮称する。例：福岡県筑紫野市永岡遺跡、同春日市門田遺跡）、形成開始時は上と同様であるが、その後いつかの大きなグループを形成するように帯状空間各所に近接したり間隔を空けたりしつつ新たな埋葬が配置され、それら複数のグループを内包しつつ累々たる線状配置へと発展する場合（＜列墓 b-2＞と仮称する。例：佐賀県吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡四波屋四ノ坪地区）がある。

調査された範囲（第7・8, 11次調査区）を観察する限り、瑞穂墓地は＜列墓 b-1＞である可能性が高い。しかし、瑞穂墓地の列形成の軸となった道路上の帯状空間（微高地の平坦地の南の傾斜変換点付近に沿って存在した既存の「道」であった可能性が高い）は東方約 100メートルの地点に検出された石勾遺跡墓地につながっている可能性もある³¹。その場合、x) 石勾墓地と瑞穂墓地が一つづきの道の二ヶ所に営まれた別墓地である可能性、それから、y) 吉野ヶ里遺跡四波屋四ノ坪遺跡のような一連の大墓地である可能性があり、y) の場合には、瑞穂墓地も＜列墓 b-2＞である可能性がある。今後、瑞穂墓地と石勾墓地の中間地点に対して、これらが一連の墓域となるのか否かの確認のために、十分な注意が必要である。

＜列墓 b-1＞の空間構造形成は、当該墓地を営んだ、その内におそらく複数の集団単位を含む大きな集団単位の一体性の表象が優先されたの葬送コミュニケーションの反復の結果であり、＜列墓 b-2＞の空間構造形成は、当該墓地を営んだ、その内におそらく複数の集団単位を含む大きな集団単位（複数のクラン的出自集団により構成される部族的集団の場合が想定される：後述）の一体性の表象とともに、それよりも小規模な集団（クラン的出自集団：後述）の一定の独自性も意識された（しかし意図的明示的な表象の対象とはなっていない）葬送コミュニケーションの反復の結果であるとなることができよう。＜列墓 b＞の多くは弥生Ⅱ期以降創発的に分化／出現した＜中心地的大型集落＞の一角に存在することが多い（例：吉野ヶ里遺跡四波屋四ノ坪地区、福岡県筑紫野市永岡遺跡第2地点）。これら中心地的大型集落には、創発的に分化した部族統合領域的地域社会を構成するクラン（clan）的出自集団（≠非居住団体（non-residential corporate groups））複数それぞれの分節（sub-clans/lineages）が集合して、地域社会内部・地域社会間のみさまざまな相互交渉、物財・（婚嫁を中心とする）人間・情報の交換などの媒介・調整が集約的に行われていたことが推測され、遠隔地からの諸種の搬入物財の集積、媒介・調整の具体的な場面の一つとしてのさまざまな祭祀に用いられた金属製の他の祭祀具の集中からも支持される。吉野ヶ里遺跡四波屋四ノ坪地区、隈・西小田遺跡第2地点などの大規模な＜列墓 b＞には当該集落だけではなくそれらに依存する周辺の衛星的小型集落の住人の埋葬もあったことが、これら大規模列墓 b が特定の居住単位に付属しないことから示唆される。また、瑞穂墓地の場合も、上述のように、これが石勾墓地と一連のものであることが判明すれば、そのことから逆に瑞穂墓地—石勾墓地をその南に有する居住集団群は、中心地的大型集落の機能を果たしていた可能性が推測されるようになる。その場合、瑞穂—石勾墓地には（その存在が証明されれば）、すでに上田龍見氏が指摘する通り³²、御供田遺跡、駿河 A 遺跡、村下遺跡の居住集団が、複数のクラン的出自集団所属を背景とする比較的小規模な部族（tribe）的集団として死者の一部を埋葬していた可能性も想定されることとなる。本集落を中心地とする＜部族的領域＞の規模、隣接する須玖遺跡群の「領域性」との間隔など、さまざまな重要かつ興味深い問題が生じてくる。このような問題の解決のためにも、瑞穂墓地と石勾墓地の関係の確定が重要であることを重ねて強調しておきたい。

このような地域社会の中心・周辺分化の背後には、弥生Ⅰ期以降進行した人口増加に伴う既存集落周辺生環境の人口支持率（carrying capacity）の突破と、その解消のための分村の進行がある。中心地的大型集落は、各地域の初期農耕集落の最古のものの一つである場合（例：福岡県福岡市有田遺跡）と、分村の集中により形成され、集落間ネットワークの形成とともに中心地化した場合（例：同春日市須玖遺跡群）があるが、

- ・ 既存の社会関係—相互交渉の維持（親村・分村（子村）関係の維持）
- ・ 分村先で遭遇する、他の出自集団から分村した集団との相互交渉の（緊張関係の緩和を前提とする）新たな

な形成

が、これら大型集落の主要な機能として浮上したと考えられる。これら二つの機能的要件の充足のため

- ・ 列の共有
- ・ 道路状帯状空間と埋葬を被覆する土甕頭群・土坑/溝により構成される空間構造が必然とする<葬列 (funerary procession)>の組織(→葬列は共同/協働性と序列化を同時に達成するテクノロジーである)(第24図A)
- ・ 個々の埋葬時の葬送参加者の空間体験(視覚体験を含む)(→長軸を揃えて配置された個々の埋葬における葬送機会参加者は多くの既存埋葬を被覆する土甕頭を視野に入れることになる)(第24図A)

が、それぞれ<共同性/協働性>の醸成・喚起に貢献したと考えられたことは重要である

中心地的大型集落に位置する<列墓b>近傍には溝口の種類における<区画墓I>(第23図C)が存在することが多い(例:吉野ヶ里遺跡北墳丘墓、隈・西小田遺跡第2地点、福岡県朝倉市栗山遺跡D群墓域など)。これらの被葬者は副葬品を持つものも多く、ある種の「上位層」を構成すると考えられる。しかし、甕棺一型式程度の時間幅に数人の被葬者が埋葬される事実(例:吉野ヶ里遺跡北墳丘墓、隈・西小田遺跡第3地点、福岡県朝倉市栗山遺跡D群墓域、福岡市西区吉武高木遺跡群墓域など)からすると、(武器形青銅器の多くが男性に副葬されることから演繹して)彼らは能力や達成により地位を得たある種の<エリート (elite)>達であり、<区画墓I>の空間構造も、中心埋葬が墓域の初葬者でありつつも質的・量的に最も豊富な副葬品を持つわけではなく(例:吉野ヶ里遺跡北墳丘墓→中央埋葬SJ1006が細形銅剣一本を副葬するのに対し、その西方に位置し、SJ1006方向へと挿入埋置されたSJ1002には有柄細形銅剣一本とガラス製管玉79個が副葬されていた)、また特定の既存埋葬に近接して新たな埋葬を設置するなどによって被葬者間の(血縁を含む)系譜的關係の近さの表象を企図するわけでもなく、中心埋葬に向かって甕棺を挿入するというルールを遵守しつつ<列墓>同様に一定の間隔を空けて埋葬を設置してゆくモードから、<列墓>と同じく、<区画墓I>において反復された葬送コミュニケーションにおいては<共同/協働性>の醸成・喚起がその重要な機能であったことが推測される(第24図A)。

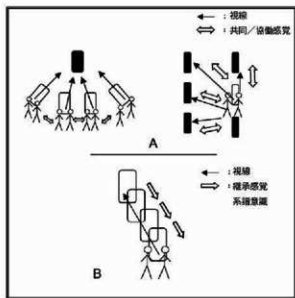
瑞穂墓地においては、調査範囲内において<区画墓I>は確認されていない。<区画墓I>は超大型の列墓bの列の終端の一つの付近に所在する場合が多い(例:栗山遺跡、吉野ヶ里遺跡土波屋四ノ坪)。11次調査区は、地形から見て瑞穂墓地の西端近くにあたる可能性があるが、今後、近傍で、もしくは7・8次調査区から東方に伸びる墓域の終端付近で、さらにもしくは、瑞穂一石勾が一連の墓地である場合には石勾墓地(石勾墓地そのものには当該時期の埋葬が少ないので)と瑞穂墓地の中間付近で、<区画墓I>の墓域が発見される可能性があることには留意しておきたい。

C. フェイズ3：弥生IV期

弥生IV期には墓地空間構造に大きな変化が生じる。

<列形成指向>から<系列形成指向>への急速な移行と、その結果としての、墓地空間構造類型における<系列形成指向墓>(第23図D)と<区画墓II>(第23図E・F)の出現・主要類型化である。また、本フェイズから、一〜二基の埋葬が他の埋葬群から離れて設置され、量的質的に隔絶した副葬品や埋葬施設を与えられた<厚葬墓>(第23図G)が出現する。

<系列形成指向>は新たな埋葬施設を既存の埋葬施設に意図的に近接して設置することを繰り返すことにより充足・表象される。また多くの場合、甕棺は既存の埋葬施設を被覆する土甕頭の方角に挿入される形で、立坑の側面に掘り込まれた棺挿入坑へと埋置される。挿入坑の対向側面には階段上のテラス数段が設置されることが多く、棺内への遺骸の安置その他の行為を遂行する人はこれを用いて坑底に降りる。また、挿入坑上



第24図 墓地と身体・視線(1)

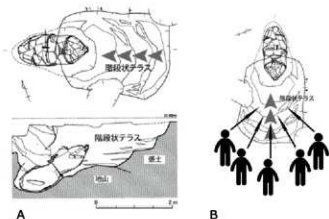
部に葬送参加者が立つことは、落盤の可能性から避けられたと考えられる。これらのことから、葬送行為の儀礼正面は喪棺挿入坑を見下ろす墓坑上面の三辺ということになる（第25図）。そうすると、例えば三つの埋葬により形成された埋葬系列においては、既存の埋葬を被覆する土腕頭に向かって新たな喪棺が挿入される葬送行為時において、参加者は既存埋葬を被覆する土腕頭を視野の端に収めつつ死者を葬送することを通じて、

- ・ 既存埋葬被葬者の記憶
- ・ 今、葬送される死者（とそれぞれの関係）の記憶
- ・ 既存埋葬被葬者と今、葬送される死者との関係の記憶
- ・ 既存埋葬被葬者と今、葬送される死者との関係とそれぞれの関係性

以上3種の記憶と1種の社会マイクロ・ネットワークの関係性認識を喚起され、もしくは構築を促されることとなる（第24図B）。そのような記憶と認識の喚起を媒介し、それに媒介された葬送コミュニケーション行為の物象化としての〈系列形成指向墓（系列墓）〉は、〈列墓〉においては喚起・構築の対象とならなかったクラナの出自集団よりもはるかに小規模な集団（サブクラナ／リネージ、もしくはそれよりも小規模な）の系譜的連続性の喚起をテーマとしたと推測される。このような埋葬系列＝マイクロ・クラスター多数から構成される〈系列墓〉（例：福岡県筑紫野市道場山遺跡、同小都市狐塚遺跡、同朝倉市栗山遺跡B群墓域）では、そこに埋葬をおこなったサブクラナ／リネージ程度の規模・内容の集団の共同性／協働性とともに／にも増して、それを構成するさらに小規模な分節（サブリネージ／竪穴住居一棟の居住グループ程度のスケール？）個々のメンバーシップとその系譜的連続性・継承感覚が表象・確認・構築されているのである（第24図B）。

瑞穂墓地では、列をなす土腕頭の各所から埋葬系列が形成されるが、上田龍児氏がすでに指摘する通り、系列を構成する埋葬数が最大で3基程度であり、上述の小規模分節単位の安定については低いものと見積もられる。しかし、興味深いことに、第7・8次調査地点西半で系列形成が盛んに認められ、また、本フェイズに続くフェイズ4に、この周辺に埋葬（石棺墓、石蓋土坑墓、土坑墓）が集中して〈区画墓Ⅲ〉の様相を呈するようになること、また、この周辺に石棺墓が集中する（被葬者の有力性を示す可能性が強い）²⁵ことから、第7・8次調査地点西半に死者を埋葬する中規模分節（サブリネージなどに相当するか？）の有力化が、小規模分節の比較的高い安定性に示される形で本フェイズに開始していた可能性が指摘される。

墓地空間構造類型における〈系列墓〉の多数化と同時に出現する〈区画墓Ⅱ〉は、矩形の低墳丘と周溝に区画される場合の多い区画内に複数（栗山遺跡C群墓域の場合には6個）の埋葬系列＝マイクロ・クラスターが形成される（第23図E）。〈区画墓Ⅱ〉の被葬者はフェイズ2の〈区画墓Ⅰ〉と同様に〈エリート（elite）〉²⁶であることは確からしいが、これが上述の埋葬系列の複合から構成されることから、〈区画墓Ⅰ〉では表象・喚起・構築の対象とならなかったエリート／上位層の系譜的連続性・継承性が前景化してきたと推測されることは重要である。〈区画墓Ⅱ〉は〈区画墓Ⅰ〉と同様、中心地的大型集落の、フェイズ2には大型の〈列墓〉を形成していた墓地の近傍に存在する事例が認められる（例：栗山遺跡C群墓域）ことから、ここにも



第25図 墓地と身体・視線（2）

- A) 部族的地域社会を構成する複数のクラナの出自集団それぞれの代表的エリートが、クラナの出自集団の系譜的連続性を代表して埋葬された可能性がある。その一方、本フェイズにおいては、フェイズ2に創発した部族的地域社会の〈中心・周辺分化〉に進展の結果、
- B) 中心地的大型集落に所在する複数のクラナの出自集団分節の代表者が各系列に埋葬された可能性もある。
- 学説的には、
- C) 中心地的大型集落を構成する複数居住単

位の内の一つが部族的地域社会の支配層としてすでに析出され、そのメンバーがこのような墓域に葬られたというモデルもある。しかし、フェイズ3の中心地的大型集落を構成する複数居住集団は相互に等質性を維持しており、一個の単位が貯蔵施設を独占したり、一角に手工業生産の痕跡を集中させつつ満などの防衛施設に囲まれたりする事例は確認されない。このことは、<区画墓Ⅱ>の被葬者の内容が上記AもしくはBである可能性の確からしさを示唆する。

瑞穂墓域においては、<区画墓Ⅰ>と同じく<区画墓Ⅱ>の存在も確認されていないが、瑞穂一石臼墓地で大型墓域を形成していた可能性を考慮すると、7・8次調査区、11次調査区近傍などで、将来的に検出される可能性は存在することに注意しておく必要がある。

<系列墓>、<区画墓Ⅱ>の検討結果を敷衍すると、<厚葬墓>（第23図G）は部族的地域社会を構成する複数のクランの出自集団を代表するエリートからさらに選ばれた／最高リーダーの位置を達成した人物の埋葬と考えられる。中心地的大型集落を構成する複数居住単位として（広域化する相互交渉／コミュニケーション・ネットワークの維持・再生産の媒介者として）有力化した複数クラン／分節のリーダー層の中から達成的に析出された部族的集団単位の代表者に、おそらくは最高厚葬墓被葬者が入手した前漢鏡などの物品が臨機かつ戦略的に贈与されることによって、下條信行氏などが指摘されるところの副葬品アセンブリッジ・葬送に動員されるその他さまざまな財・労力の成層構造が形成されたと考えられる。

比較的近傍（須玖遺跡群）に<厚葬墓>被葬者となるリーダーが居住していた本フェイズに、瑞穂墓地に死者を埋葬していた人々、グループとそれとの関係がどのようなものであったか？パラマウント・チーフとして「遠く仰ぎ見る」ような存在であったのか、いわゆる「ビッグマン」的存在権能が、中心地的大型集落として巨大化したものの中に住む、ある出自集団分節に固定されつつあるような状況であったのか、今後も検討を続ける必要がある。（筆者は後者に近いイメージを持っている。）

D. フェイズ4：弥生V期

弥生V期の動態は複雑かつ目まぐるしい。その前半（高三瀬式期）、ことにその前葉には集落数の減少が見られるとともに、存続する墓地における埋葬数の減少も顕著である。それと同時に、フェイズ2に営まれた<区画墓Ⅱ>に、100年以上の埋葬空白期を経て、単数ないし少数の副葬品を有する喪葬墓が設けられる例が栗山遺跡D群や佐賀県鳥栖市柚木村遺跡などで見られる。筆者はこれらの特異な少数の埋葬を、フェイズ3に分化を本格化させた上位層の権威の源泉のゆらぎ、すなわち玉葬新建国に伴う楽浪郡の一時的独立、青銅鏡などの戦略的配布物財（原初的なく威信財）的な性格を創発しつつあった可能性がある）の入手の途絶などに起因する広域社会関係のゆらぎへの対応として、動揺する既存の社会ネットワークの基盤が形成された時期＝フェイズ2の上位層の（おそらく口承伝承の形で保存された）記憶を喚起し、それと特定死者との間に系譜的連続性を仮構することにより、社会諸関係の再構築・安定化が企図された結果であると推測している。また、同じくフェイズ2に営まれ、その後墓域としての使用が途絶えていた<列墓>の使用が「再開」される例（佐賀県鳥栖市儀徳遺跡）や、厚葬墓を含む<列墓>が新たに形成される事例（同佐賀市七ヶ瀬遺跡）などから、このフェイズに、動揺したさまざまな位相の社会関係、また動揺の後に急速に広域化を再開した相互交渉ネットワークへの対応として、葬送コミュニケーション・システムにおけるフェイズ2同様の共同性／協働性の喚起が選好されたと考えられる。

同時に、V期前葉後半（高三瀬式期後半）以降、<区画墓Ⅲ>（第23図H）が登場し、一般層の埋葬そのものが急速に減少する中、墓地空間構造形成パターンの主座を占めるようになる。<区画墓Ⅲ>の空間構造形成の指向性は<グリッド形成指向>、すなわち乳幼児も含む、サブクランないしはリネージュ、もしくはそれよりも小さな規模の集団構成員を、それらの所属単位内における関係性により「グリッドの秩序」（誰それは生前においてこのような位置付けにあったから／（乳幼児の場合）成人すればこのような地位に着くはずだったからここに）に空間的に位置付けし埋葬することの反復である。

瑞穂墓地では、V期前半から7・8次調査区西半に比較的高規格の大きい埋葬施設（木棺墓か）が集中するようになるとともに（西群）、東半（東群）や東南隅（東南群）にも埋葬が認められ、略三群の墓群形成が認められるが、これらのうち、先に述べた通り、フェイズ3に埋葬系列の形成が盛んに見られた7・8次調査区西半部分に西群の形成が開始される、V期前半から後半へと大型木棺墓→石蓋土坑墓→石棺墓と比較的優勢な埋葬が継続す

ること、V期後半には西群に朱を散布する埋葬や副葬品が集中することが注目される。西群と東群が集団分節として前代フェイズ3にすでに明確に分化していたか否かはさらなる検討が必要だが、西群と東群はフェイズ3段階からある種の競合関係にあり、その中から西群が<区画墓Ⅲ>として、少なくとも7・8次調査、11次調査区に埋葬を行ってきたグループの分節群の中からそれらを代表するような分節として現れてくること、その過程で東南群の短期的出現と消滅があることなどは、近傍の福岡市弥永原第6次調査地点墓^④や春日市寺田池北墓^⑤で認められる過程と類似しており、フェイズ4を通じてクラン分節とリネージよりも小さな規模の集団分節間に優劣関係が生じ、それらの内の優位を確立したものがクラン分節規模の集団の「代表」になってゆくこと、そのような動きの起点がフェイズ3と弥生Ⅳ期/須玖Ⅱ式期に遡る可能性があることは興味深い。

弥生V期後半(下大隈式期)には、貯蔵施設の占有と希少財の集中に考古学的に特徴づけられる<エリート区画(elite precincts)>が初めて明確化する(例:佐賀県鳥栖市千塔山遺跡)。これらは規模的に見てクラン的出自集団分節/サブクラン/リネージの規模・内容の集団の居住単位と見られる。社会的諸関係の混乱期を経て、再び広域化傾向を強める相互交渉ネットワークを背景として、調整媒介対象となる社会諸関係の多様化、複雑化、対面的処理機会の頻度の不可避の減少などが、媒介者の地位の特定出自集団分節への固定化と、共同性/協働性の喚起という二つの機能的要件を導いたものと考えられる。

E. 古墳時代初頭

瑞穂墓地においては、古墳時代初頭には、3基の単一埋葬施設低墳丘墓/区画墓が設置されるが、フェイズ4までの埋葬施設を被覆する土観頭群は明確に残存しているとともに、この場所にまつわる埋葬に関わる記憶は口承伝承などを通じて、フェイズ3から少しずつ明確化してきたクラン分節とリネージ的集団よりも小規模な集団分節の葬地についても意識が行われていたと推測される。1号墳がフェイズ4に<区画墓Ⅲ>化して有力群としての位置を明確にした西群近接地に設置されたことは偶然ではないだろう。

Ⅲ. まとめ

瑞穂墓地の3次における詳細な発掘調査により、弥生時代北部九州地方における墓地空間構造形成原理の変遷が弥生Ⅱ期から古墳時代初頭に至るまでの時間幅で一貫して確認されたことは、上にその都度触れたその他の関連する含意とともに、瑞穂墓地と石臼遺跡を中心とする周辺遺跡が、今後の当該地域弥生時代墓制と社会の研究に<標準遺跡>的役割を果たしてゆくであろうことを示す。今後、瑞穂墓地周辺地域における調査の進展は、そのような意味からも重要な意味を持つことを強調して小論を終えたい。

註

- 1) 以下で紹介する溝口の墓地空間構造形成原理分類と瑞穂墓地第7・8次、11次調査地点墓域(「瑞穂墓地」と略称)の様相の時期的変遷との対比は、上田龍児氏(大野城市教育委員会(編)、2022.大野城市文化財調査報告書第200集:瑞穂遺跡5.大野城:大野城市教育委員会、pp.222-225)、山元暉平氏(本書、pp.38-40)によってすでに適切かつ詳細に行われている。参照されたい。
- 2) 以下は、溝口孝司、2023.弥生時代の墓制、季刊考古学別冊43:九州考古学の最新線1(宮本一夫編)、pp.59-64.東京:雄山閣。を改変し、瑞穂墓地に関する所見を加えたものである。
- 3) 大野城市教育委員会(編)、2022.大野城市文化財調査報告書第200集:瑞穂遺跡5.大野城:大野城市教育委員会、p.227 参照
- 4) 上掲3)、pp.225-229.
- 5) 溝口孝司、2021.福岡県福岡市弥永原遺跡第6次調査地点墓域の研究:北部九州弥生時代Ⅳ～Ⅴ期墓地の一例の社会考古学的検討、岩永省三先生退職記念論文集:持続する志 上(岩永省三先生退職記念事業会編)、pp.261-76.福岡:岩永省三先生退職記念事業会。
- 6) 上掲5) 文献。
- 7) 溝口孝司、印刷中。北部九州弥生Ⅳ～Ⅴ期の二つの墓地にみる上位層の析出過程と「対抗/抵抗」:弥永原遺跡6次調査地点と寺田池北遺跡を事例として、宮本一夫先生退職記念論文集 上(宮本一夫先生退職記念事業会編)福岡:宮本一夫先生退職記念事業会。

圖 版



(1) 調査区南半部全景 (南東から)



(2) 調査区北半部全景 (南東から)

図版 2



(1) 1号壙棺墓全景 (東から)



(5) 3号壙棺墓全景 (北西から)



(2) 1号壙棺墓土層 (南から)



(6) 4号壙棺墓人骨出土状況 (南西から)



(3) 1号・2号壙棺挿入状況 (北から)



(7) 4号壙棺墓全景 (北東から)



(4) 2号壙棺墓全景 (南東から)



(8) 5号壙棺挿入状況 (南西から)



(1) 5号甕棺墓人骨出土状況 (南西から)



(5) 7号甕棺墓全景 (南東から)



(2) 5号甕棺墓全景 (北東から)



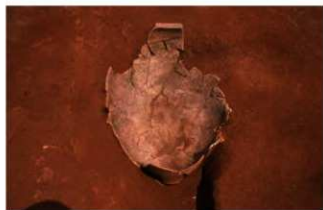
(6) 8号甕棺挿入状況 (南東から)



(3) 6号甕棺墓人骨出土状況 (北西から)



(7) 8号甕棺墓人骨出土状況 (北から)



(4) 6号甕棺墓全景 (北西から)



(8) 8号甕棺墓全景 (北から)

図版4



(1) 9号墓棺挿入状況(南東から)



(5) 10号墓棺全景(北東から)



(2) 9号墓墓人骨出土状況(北から)



(6) 12号墓棺挿入状況(南西から)



(3) 9号墓棺全景(北から)



(7) 12号墓棺全景(北西から)



(4) 10号墓棺挿入状況(南から)



(8) 13号墓棺挿入状況(南東から)



(1) 13号墓棺墓全景 (北西から)



(5) 16号墓棺墓人骨出土状況 (南から)



(2) 14号墓棺墓全景 (北から)



(6) 16号墓棺墓全景 (北から)



(3) 15号墓挿入状況 (北西から)



(7) 17号墓棺墓人骨出土状況 (南から)



(4) 15号墓棺墓全景 (北東から)



(8) 17号墓棺墓全景 (南から)



(1) 18号壙棺挿入状況(南東から)



(2) 18号壙棺墓全景(西から)



(3) 18号壙棺墓墓坑工具痕跡
(北東から)



(1) 18号墓棺墓土層 (南から)



(5) 21号墓棺墓全景 (北東から)



(2) 19号墓棺挿入状況 (南東から)



(6) 22号墓棺墓全景 (南東から)



(3) 19号墓棺墓全景 (西から)



(7) 23号墓棺墓全景 (南東から)



(4) 20号墓棺墓全景 (北西から)



(8) 24号墓墓人骨出土状況 (東から)



(1) 24号墓全景 (東から)



(5) SX02 (南から)



(2) SX01 全景 (北東から)



(6) 調査風景 1 (東から)



(3) SX01 土層 (北東から)



(7) 調査風景 2 (南東から)



(4) SX01 床面断ち割り (北東から)



(8) 調査前全景 (南東から)







13



16



14



17



15



18





24



25



28



29



27



30



報告書抄録

ふりがな	みずほいせき								
書名	瑞穂遺跡6								
副書名	第11次調査								
巻次	6								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第211集								
編著者名	山元瞭平(編)・舟橋京子・米元史織・田淵朱莉・足立達朗・田尻義之・溝口孝司								
編集機関	大野城市								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092(501)2211								
発行年月日	2024年3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
瑞穂遺跡 第11次調査	福岡県大野城市瑞穂町2丁目31番6				33° 31′ 56.9″	130° 28′ 36.7″	2022.4.6 ～ 2022.7.15	185㎡	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
瑞穂遺跡 第11次調査	墳墓遺跡	弥生時代	甕棺墓・木棺墓・土坑墓		弥生土器・甕棺				
要約	調査の結果、弥生時代中期中頃から後期初頭にかけての甕棺墓24基・木棺墓1基・土坑墓1基を確認した。甕棺墓列は、隣接する瑞穂遺跡7・8次調査で確認された二列埋葬墓の延長部分に当たる。								

大野城市文化財調査報告書第 211 集

瑞穂遺跡 6

令和 6 年 3 月 31 日

発 行 大野城市
福岡県大野城市曙町 2-2-1

印 刷 有限会社 成光社
福岡県福岡市南区大楠 1-29-33